

# 須賀谷古墳群・畠谷東遺跡発掘調査報告書

1985

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

広島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書第41集  
須賀谷古墳群・塩谷東遺跡発掘調査報告書 正誤表

頁・行	誤	正
背表紙	発掘調査報告書	発掘調査報告書
43頁第 6 表	第28図25 口径	第28図25 口径27.6
43頁第 6 表	第28図25 類様	第28図25 類様25.3
44頁第 6 表	第33図 1	第32図 1
47頁第 6 表	第36図12 色調黄褐色～淡	第36図12 色調淡黄褐色
48頁第 6 表	第38図 1 痕跡をとど	第39図 1 痕跡
49頁第 6 表	第39図 3 (14~15条 1 ca)	第39図 3 (14~15条 / ca)
奥付	たたみひがし	たたみだにひがし

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和59年4月～5月に実施した安芸府中有料道路建設事業に係る須賀谷古墳群・豊谷東遺跡（広島市東区温品所在）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島県道路公社から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 遺構の実測・写真撮影は、三枝健二・辻満久・妹尾周三・梅本健治及び調査補助員の船井向洋が、遺物の実測は、辻・船井・梅本が、遺物の写真撮影及び実測図のトレースは梅本が行った。
4. 本書は、梅本が執筆・編集した。
5. 本書に使用した遺構の表示記号は、次のとおりである。

S B : 住居跡, S K : 土塁, S P : 主柱穴, S X : 性格不明遺構

6. 図版と挿図の遺物番号は同一である。但し、図版の遺物番号は次のように略号化した。  
(例) 27-1…第27図1を示す
7. 本書に用いた方位はすべて磁北である。
8. 第1図は、建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図（上深川、海田市）を使用した。
9. 「須賀谷第1号古墳」は、本村豪章「広島県安芸郡温品須賀谷古墳調査報告」「芸備地方史研究」第34号 昭和35（1960）年の「須賀谷古墳」と同一の古墳である。また、本古墳は文化庁「全国遺跡地図 広島県」 昭和57（1982）年等で「清水谷古墳」の名称が用いられているが、今後は「須賀谷第1号古墳」に統一したいので、関係各位の御協力をお願いする次第である。

## 目 次

Iはじめに	1
II位置と環境	2
III須賀谷古墳群	5
IV疊谷東遺跡	23

## 挿 図 目 次

第1図 須賀谷古墳群・疊谷東遺跡周辺遺跡分布図(1:25,000)	3
第2図 須賀谷古墳群周辺地形図(1:2,000)	5
第3図 須賀谷古墳群地形測量図(1:400)	6
第4図 須賀谷古墳群墳丘遺存図(1:200)	7
第5図 須賀谷古墳群墳丘断面図(1:80)	8
第6図 須賀谷第1号古墳周溝内出土土器実測図(1:3)	9
第7図 須賀谷第1号古墳主体部実測図(1:40)	10
第8図 須賀谷古墳群SK1実測図(1:40)	11
第9図 須賀谷古墳群SK2実測図(1:40)	11
第10図 須賀谷古墳群SK2出土鉄器・金環実測図(1:2)	12
第11図 須賀谷古墳群SK2出土玉類実測図(1:1)	13
第12図 須賀谷古墳群SX3実測図(1:60)	14
第13図 須賀谷第2号古墳第1主体部実測図(1:40)	16
第14図 須賀谷第2号古墳第1主体部出土玉類実測図(1:1)	18
第15図 須賀谷第2号古墳第2主体部出土鉄器・玉類実測図(1:2, 1:1)	19
第16図 須賀谷第2号古墳第2主体部実測図(1:40)	20
第17図 須賀谷古墳群SK4実測図(1:40)	20
第18図 疊谷東遺跡周辺地形図(1:2,000)	23

第19図	疊谷東遺跡遺構配置図(1:200) .....	24
第20図	疊谷東遺跡土層断面図(1:80).....	25
第21図	疊谷東遺跡 S B 1・S B 2 実測図(1:60).....	26
第22図	疊谷東遺跡 S B 3・S B 4 実測図(1:60).....	27
第23図	疊谷東遺跡 S B 5 出土土器実測図(1:3).....	28
第24図	疊谷東遺跡 S B 5 実測図(1:60).....	29
第25図	疊谷東遺跡 S B 6・S B 7・S B 8 実測図(1:60).....	30
第26図	疊谷東遺跡 S B 9・S B 10 実測図(1:60).....	31
第27図	疊谷東遺跡 S B 9 出土土器実測図(1:3).....	32
第28図	疊谷東遺跡 S B 9・S B 10 出土土器実測図(1:3).....	33
第29図	疊谷東遺跡 S K11 実測図(1:40).....	34
第30図	疊谷東遺跡 S K12 実測図(1:40).....	34
第31図	疊谷東遺跡 S K13 実測図(1:40).....	35
第32図	疊谷東遺跡 S K13 出土土器実測図(1:3).....	36
第33図	疊谷東遺跡出土鉄器実測図(1:2).....	36
第34図	疊谷東遺跡 S X14 実測図(1:60).....	36
第35図	疊谷東遺跡 S X14 出土土器実測図(1:3).....	37
第36図	疊谷東遺跡調査区出土土器実測図(1)(1:3).....	38
第37図	疊谷東遺跡調査区出土土器実測図(2)(1:3).....	39
第38図	疊谷東遺跡調査区出土石器・土製品実測図(1:2).....	39
第39図	疊谷東遺跡周辺出土土器実測図(1:3).....	40

### 図版目次

- 図版 1 a 須賀谷古墳群遠景(南より)
  - b 须賀谷古墳群全景(調査前, 南より)
- 図版 2 a 须賀谷第1号古墳全景(調査後, 東より)
  - b 须賀谷第1号古墳周溝断面(南より)
- 図版 3 a 须賀谷第1号古墳主体部(北より)
  - b 须賀谷古墳群SK2(西より)
- 図版 4 须賀谷第1号古墳出土遺物
- 図版 5 a 须賀谷古墳群SK1(北より)

- b 須賀谷古墳群 S X 3 (南より)
- 図版 6 a 須賀谷第 2 号古墳全景(調査後, 東南より)
- b 須賀谷第 2 号古墳周溝断面(西より)
- 図版 7 a 須賀谷第 2 号古墳第 1 主体部(北より)
- b 同上玉類出土状況(北より)
- 図版 8 a 須賀谷第 2 号古墳第 2 主体部(南より)
- b 同上鐵刀子出土状況(南より)
- 図版 9 a 須賀谷古墳群 S K 4 (北より)
- b 須賀谷第 2 号古墳出土遺物
- 図版 10 a 疊谷東遺跡遠景(西より)
- b 疊谷東遺跡近景(調査前, 西より)
- 図版 11 a 疊谷東遺跡 S B 1 ~ S B 5 (西より)
- b 疊谷東遺跡 S B 1 · S B 2 (東南より)
- 図版 12 a 疊谷東遺跡 S B 3 · S B 4 (西より)
- b 疊谷東遺跡 S B 5 · S K12(西より)
- 図版 13 a 疊谷東遺跡 S B 6 · S B 7 · S B 8 (西より)
- b 疊谷東遺跡 S K11(南より)
- 図版 14 a 疊谷東遺跡 S B 9 · S B 10(西より)
- b 疊谷東遺跡 S K13(西より)
  - c 疊谷東遺跡 S X14(北より)
- 図版 15 疊谷東遺跡出土遺物(1)
- 図版 16 疊谷東遺跡出土遺物(2)
- 図版 17 疊谷東遺跡出土遺物(3)

## 表 目 次

第 1 表 須賀谷古墳群出土小玉類型一覧表.....	13
第 2 表 須賀谷古墳群 S K 2 出土小玉分類表.....	14
第 3 表 須賀谷古墳群 S K 2 出土小玉計測表.....	15
第 4 表 須賀谷第 2 号古墳第 1 主体部出土小玉計測表.....	17
第 5 表 須賀谷第 2 号古墳第 1 主体部出土小玉分類表.....	19
第 6 表 疊谷東遺跡出土土器觀察表.....	41~49

## I はじめに

本発掘調査は、広島市東区馬木四丁目から安芸郡府中町鶴江二丁目に至る安芸府中有料道路建設事業に係るものである。この安芸府中有料道路は、県道広島中島線のバイパスとして建設されるもので、山陽自動車道と広島市の中心部を結ぶ都市環状道路の一環として、長年にわたって慢性化しているこの地区的交通渋滞の解消および生活環境の改善に寄与することはもとより、賀茂学園都市・東部流通団地・県立広島緑化植物公園等の整備に伴って生じる将来の自動車交通量の増加に対応し、地域経済の発展に寄与しようとするものである。

昭和56（1981）年6月、広島県道路公社（以下「道路公社」という。）から広島市教育委員会（以下「市教委」という。）に、安芸府中有料道路建設事業予定地内の埋蔵文化財の有無並びに取扱いについて照会があった。市教委では、事業予定地内の分布および試掘調査を実施し、弥生時代後期の集落跡（疊谷東遺跡）を確認した旨、昭和58年8月道路公社に回答した。この遺跡の以後の取扱いについては、広島県教育委員会（以下「県教委」という。）がひきつぎ、道路公社との間で協議を重ねたが、現状保存は困難であるとの結論に達したため、同年9月県教委は道路公社に対して工事着手前に発掘調査を実施する必要がある旨通知した。道路公社は、これをうけて同年10月、財團法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）に発掘調査を依頼した。一方、須賀谷古墳については、周知の古墳であるため、県教委では現状保存を前提として道路公社と再三協議を行なったが、設計変更が不可能であるため現状保存は困難であるとの結論に達したため、昭和59（1984）年3月県教委は道路公社に対して、工事着手前に発掘調査を実施する必要がある旨通知した。道路公社はこれをうけて同年3月センターに須賀谷古墳の発掘調査を依頼した。同年4月、センターは道路公社との間で疊谷東遺跡・須賀谷古墳発掘調査の委託契約を締結し、昭和59（1984）年4月9日～5月25日の約2か月間、両遺跡の発掘調査を実施した。本報告書は、この疊谷東遺跡・須賀谷古墳群の発掘調査の成果をまとめたものであり、当地域研究の新たな資料として広く活用されれば幸いである。

なお、須賀谷古墳については当初1基のみを調査対象としていたが、調査の進展のなかで第2号古墳を確認したため、第1号古墳とともに計2基の発掘調査を行った。よって、以後の記述に際しては、「須賀谷古墳群」を遺跡名として使用する。

調査にあたっては、広島市教育委員会、広島県道路公社及び地元の方々から多くの協力を得た。記して謝意を表したい。

## II 位置と環境

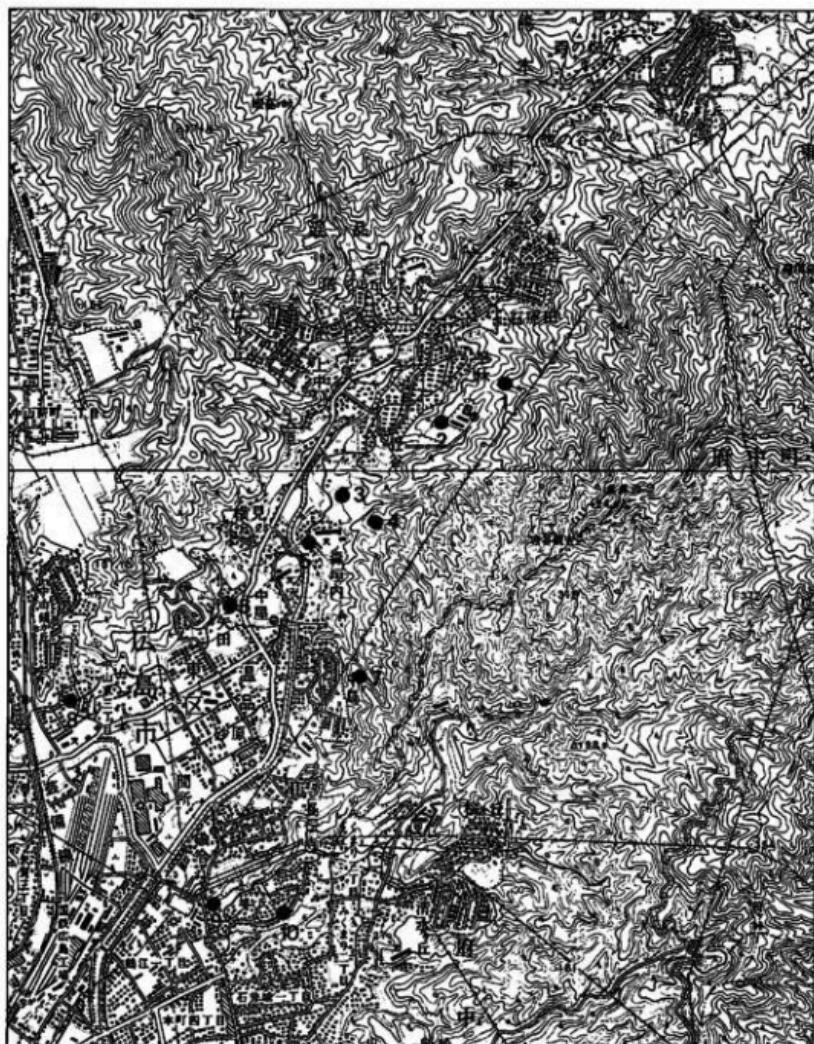
広島市東区温品は、市中心部の東北東約6kmに位置し、旧安芸郡安芸町に属する。付近には、北西側に連なる木ノ宗山(標高413m)・二ヶ城山(標高483m)などの山塊と、南東側からせまる奥安々字山塊(標高682m)とにはさまれて、北東一南西方向の断層谷が走っており、この幅わずかに500~1,200mの狭隘な断層谷の中央を、馬木あたりを分水嶺にして、北に小河原川、南に府中大川(通称温品川)の二河川が流下している。温品地区は、南流して太田川デルタの東縁を流れる猿猴川に注ぐこの府中大川沿いの狭隘な谷がその幅をひろげはじめる辺りにある。太田川デルタが未発達で現在よりも広島湾が奥に入りこんでいた古代にあっては、近くを古代山陽道が通っていたことと併せ、水陸交通の要衝であったことは否定できない。また、県西部でも有数の遺跡集中地域である太田川下流域に近いことを併せ考えれば、古来温品地区は、府中・矢野・海田地区などと共に広島湾東部沿岸域でも政治的・経済的に重要な位置にあったであろうことは想像に難くない。以下においては、温品地区を中心に太田川下流東岸域~広島湾東部沿岸域の主要遺跡について、時代ごとに概観していきたい。

<sup>(1)</sup> 繩文時代 比高20mの独立丘陵上にある早稻田神社遺跡は、繩文早期の押型文土器、磨製石斧を出土している。また、後期後半~晚期の土器を出土する県史跡比治山貝塚、晚期の土器を出土する中山貝塚(第1貝層)などがある。

<sup>(2)</sup> 弥生時代 丘陵先端部に立地する中山貝塚は、繩文晩期~弥生中期の5枚の貝層をもち、特に前期後半の第3貝層からは多くの弥生土器・石器・骨角製品などが出土している。後期になると、広島湾岸・太田川下流域でも遺跡が増大し、その多くは貝塚を伴っている。なかでも、真亀遺跡群<sup>(3)</sup>、上深川遺跡<sup>(4)</sup>、西山258m貝塚<sup>(5)</sup>などは著名である。温品地区周辺では、豊谷東遺跡の下方尾根上に立地する県史跡豊谷遺跡をはじめ、標高50~200mのなだらかな尾根上・丘陵斜面に、森垣内貝塚・平林貝塚・塔ノ丘貝塚・天王貝塚などが立地している。

<sup>(6)</sup> 古墳時代 太田川下流域は、県西部でも有数の古墳密集地域であり、特に竪穴式石室・箱式石棺を内部主体とする前期古墳が比較的多く存在する。中小田第1号古墳は、吾作銘三角縁四神四獸鏡を出土し、竪穴式石室を内部主体とする県内最古の古墳で、4世紀後半の成立とされる。後続する古墳としては、太田川西岸の神宮山第1号古墳(4世紀代)、宇那木山第2号古墳(5世紀前半)、太田川東岸の上小田古墳<sup>(7)</sup>(5世紀中葉)などがあり、前二者は竪穴式石室を、後者は箱式石棺を内部主体とする。また、横穴式石室をもつ後期古墳としては、後谷古墳、惣田古墳がある。

<sup>(8)</sup> 古代 古代山陽道の安芸駅館跡と推定される下岡田遺跡では、計6次にわたる調査で、奈良後期~平安初期を中心とした時期の掘立柱建物跡4棟などが検出され、重圓文軒丸瓦・綠釉陶器・灰釉陶器・木簡などが出土している。このほか、貝層中から平安中期の須恵器・綠釉陶器などが出土した城山北貝塚がある。



第1図 須賀谷古墳群・疊谷東遺跡周辺遺跡分布図(1:25,000)

1. 疊谷東遺跡
2. 疊谷遺跡
3. 永町山城跡
4. 北谷山城跡
5. 森垣内貝塚
6. 屋太山城跡
7. 須賀谷古墳群
8. 中山貝塚
9. 下筒田遺跡
10. 城山北貝塚

中世 該期の遺跡としては、前出の下岡田遺跡で掘立柱建物跡4棟が検出されているほかは、金子氏（のち溫科氏）の居城とされる永町山城跡をはじめ、屋太山城跡・北谷山城跡などの山城跡がある。

（註）

- (1) 潮見浩「広島市牛田早稻田山遺跡の発掘調査報告」『広島考古研究』2 昭和35(1960)年。
- (2) 松崎寿和「広島市比治山貝塚」『広島県史蹟名勝天然記念物調査報告』6 昭和26(1951)年。
- (3) 松崎寿和・潮見浩「広島県中山遺跡」『日本農耕文化の生成』昭和36(1961)年。
- (4) 広島県教育委員会「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」昭和52(1977)年。
- (5) 潮見浩「広島県安佐郡高陽町上深川遺跡」「弥生式土器集成(一)」昭和33(1958)年。
- (6) 藤田等「巴形網器を出土した西山貝塚調査概報」『日本考古学協会昭和40年度大会研究発表要旨』昭和40(1965)年。  
川越哲志ほか「広島市西山貝塚の第二次調査」『史学研究』119 昭和47(1972)年。
- (7) 広島県教育委員会「豊谷遺跡」『広島県文化財調査報告』第14集 昭和58(1983)年。
- (8) 広島市教育委員会「中小田古墳群」昭和55(1980)年。
- (9) 本村豪章「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」『広島考古研究』2 昭和35(1960)年。
- (10) 府中町教育委員会「府中町下岡田古代建築群報告第一集第一次発掘概報」昭和38(1963)年。ほか
- (11) 府中町教育委員会「城山北貝塚」昭和51(1976)年。

参考文献

- 広島市役所『新修広島市史』第1巻総説篇 昭和36(1961)年。  
安芸町『安芸町誌』上巻 昭和48(1973)年。  
安芸郡府中町『安芸府中町史』第1巻通史篇 昭和54(1979)年。  
広島市教育委員会『山城』昭和57(1982)年。  
西本省三・葛原克人編『日本城郭大系 第13巻 広島・岡山』昭和55(1980)年。

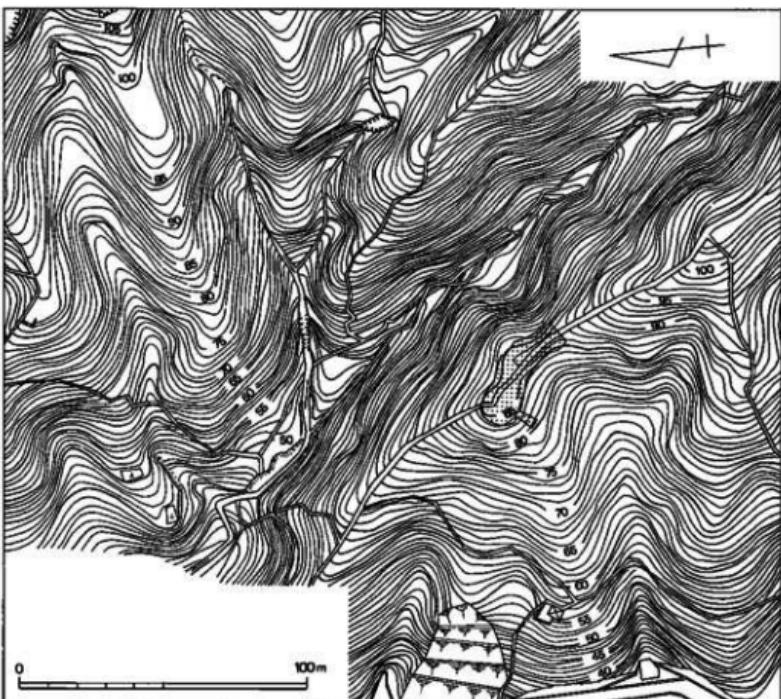
### III 須賀谷古墳群

#### 1. 調査の概要

須賀谷古墳群は、広島市東区温品字須賀谷519, 520, 532-2, 533-1に所在する2基の古墳で構成される古墳群である。

本古墳群は南流する府中大川東岸に位置し、奥安々宇山塊（標高682m）から西北方に派生する小尾根上に立地する。標高86mのこの小尾根先端に第1号古墳があり、尾根基部側には第2号古墳が相接して存在する。眼下の府中大川沿岸にひろがる狭隘な谷平野部からの比高は80~90mである。

両古墳とも、墳丘背後を直線的な周溝によって囲む形態のもので、墳裾は明瞭でなく、その墳丘規模・墳形とともに詳らかにしえない。第1号古墳は墳頂北端に主体部（箱式石棺）1基がある。その他の遺構としては、墳頂部南半に長方形土塁（SK1）、墳丘西斜面に住居跡状遺構（SX3）、また、墳丘背後の周溝底面には長方形土塁（SK2）が各々存在する。遺物は、周溝上層から土師器片少量、SK2から鐵鎌・鐵鎌・金環・ガラス小玉が出土している。次に、第2号古墳は2基の主体部（いずれも二重土塁）をもち、墳丘背後に直線的な



第2図 須賀谷古墳群周辺地形図(1:2,000) アミ目は調査区を示す

周溝が存在する。主体部はいずれも墳頂部から西斜面にかけて造られており、その長軸はいずれも尾根主軸に直交している。遺物は、第1主体部から勾玉・管玉・ガラス小玉、第2主体部から鉄刀子・管玉片が各々出土している。なお、第2号古墳周溝外の尾根頂部で土塚(SK4)を検出した。遺物は、土師器細片のみである。

調査方法は、先ず両古墳の墳頂部中央に任意に基準杭を設定し、この2本の基準杭を中心にして東西南北に十字の土層観察用の畦(幅50cm)を残して、表土の全面的除去を行った。厚さ約5cmの表土を除去すると、黄白色の地山(花崗岩バイラン土)が露呈し、各造構はこの地山面で検出した。各造構の埋土は明黄褐色～黄褐色砂質土である。

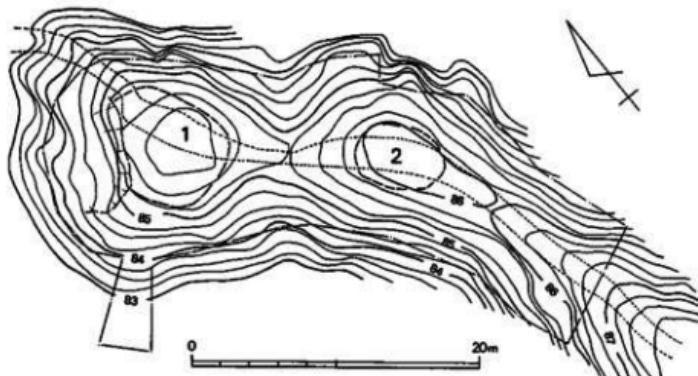
## 2. 第1号古墳

### 調査前の状況(第3図、図版1b)

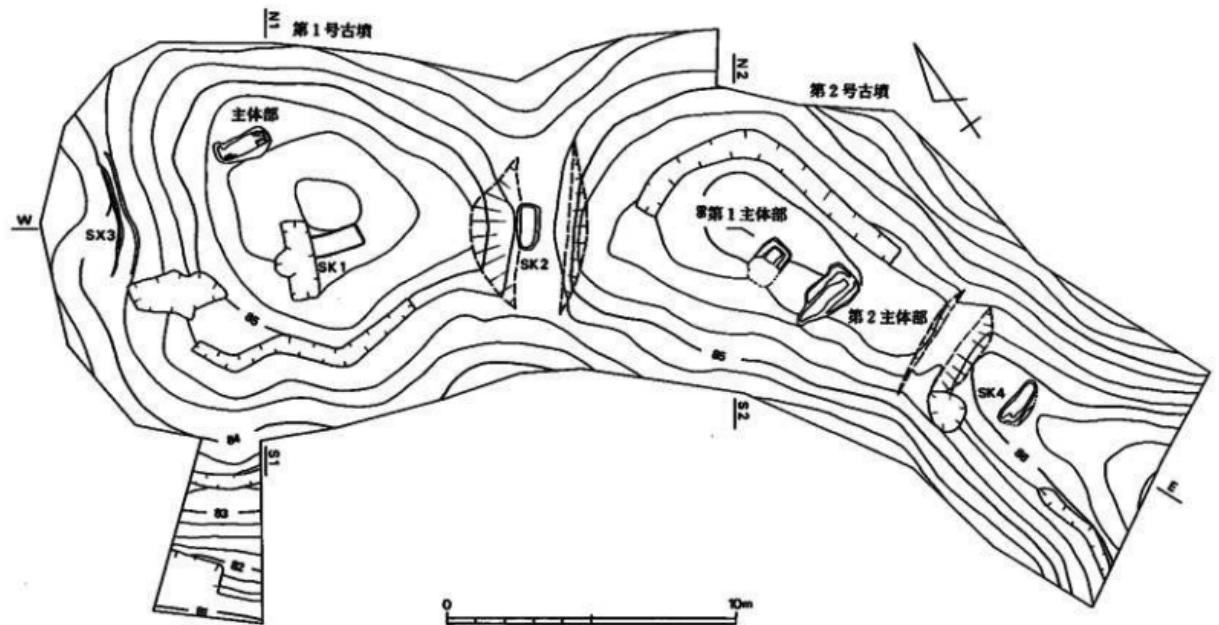
第1号古墳は尾根の先端部に位置する。尾根が下りはじめる西側から見ると、墳丘の北・西・南斜面が明確な墳端部をもたず、そのまま急峻な自然斜面に続くために、実際以上に墳丘が高く規模の大きい円墳で、その規模については、ほぼ直径11m程度と思われた。なお、墳頂には南北9m、東西7mの広い平坦面があり、最高所の標高は86m弱である。

### 墳丘(第4・5図、図版2a)

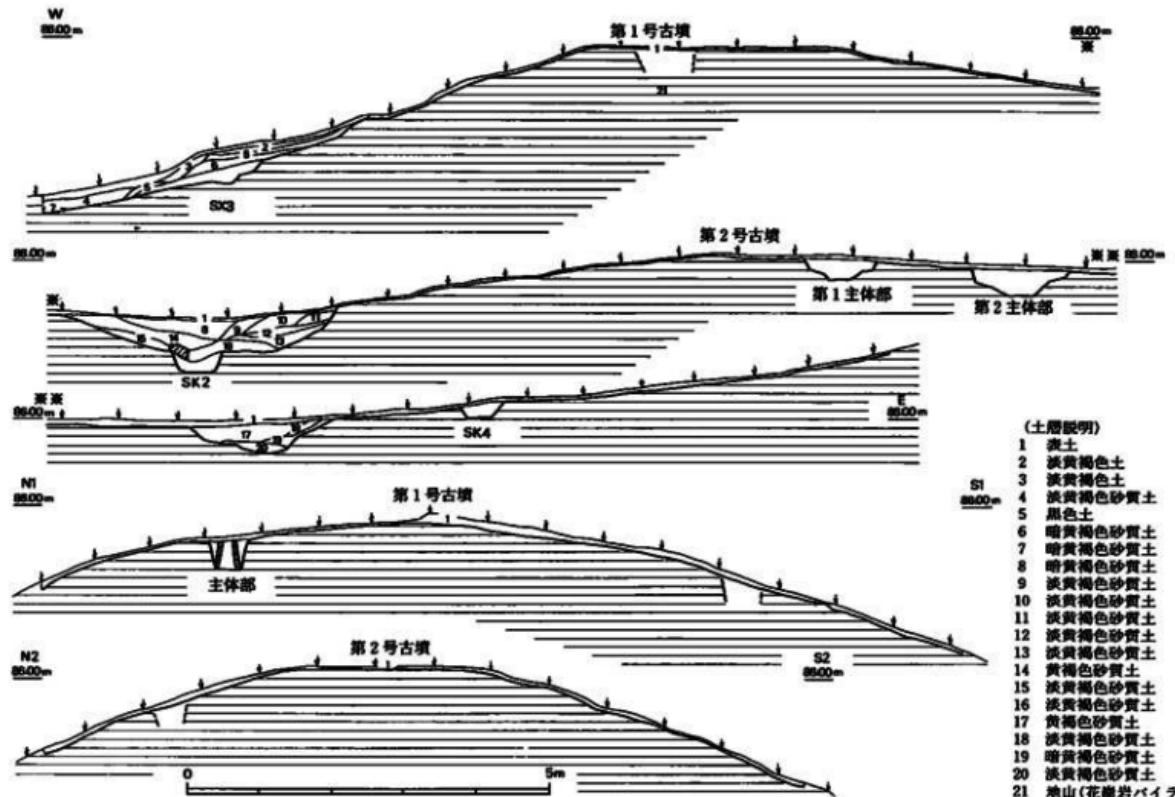
墳丘の北・西・南斜面はいずれも墳端を明らかにできなかったが、ただ、墳丘背後に認められた周溝の底面と同一標高(84.7m)をほぼ墳裾と考えると、西北一東南13m、東北一西南11mの平面不整円形の円墳である。盛土は現状では全く認められない。墳頂にはかなり広い平坦面がひろがり、断面台形状を呈する。墳丘背後の尾根鞍部を掘り込んで直線的な周溝を造っている以外には何ら墳丘への造作は認められない。なお、墳丘南斜面には植林に伴う溝状の擾乱塗が2本、また、墳頂部及び西斜面には高圧線の鉄塔埋設に伴う方形の擾乱塗が各々認められた。



第3図 須賀谷古墳群地形測量図(1:400)



第4図 須賀谷古墳群墳丘遺存図(1:200)



第5図 須賀谷古墳群墳丘断面図(1:80)

### 周溝（第4・5図、図版2a・2b）

周溝は、尾根鞍部を掘りこんで造られた直線的な溝である。規模は、長さ5.3~6.1m、上端幅1.5~4.0m、下端幅1.5~1.9m、深さは最も深い個所で0.64mである。横断面は逆台形で、溝底面は平坦である。その南・北端部で屈曲して自然斜面に連なる。周溝内には、淡黄褐色砂質土と黄褐色砂質土が堆積している。

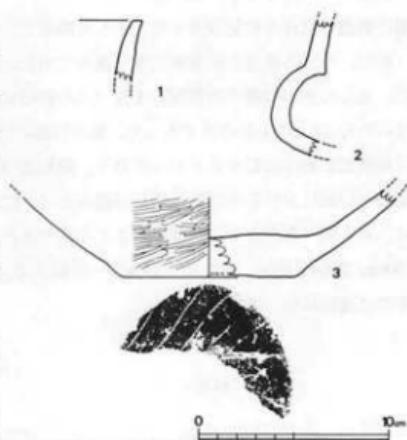
周溝内からは、上層を中心に土師器片20~30片が出土した（第6図1~3）。大半は体部片である。図示した1~3はいずれも複合口縁の壺の部分である（同一個体の可能性が高い）。1は口縁部で、若干外反気味ながらほぼ直線的に外上方に立ちあがる。

内・外面とも横ナデ調整を施している。2は口縁～頸部片で、頸部から強く「く」字状に屈曲し、やや外上方に垂直に立ちあがる口縁部をもつ。内・外面とも横ナデ調整を施す。3は底部片で、外底面に木葉痕が観察される。内面は不定方向のナデ調整、外面は横位ヘラミガキを密に施している。1~3とも、内・外面が僅かに赤味がかかった淡黄褐色を呈する。

### 内部主体（第7図、図版3a）

内部主体は、墳頂の北端に位置する箱式石棺で、長軸方位はN85°Wを示し、ほぼ尾根主軸に平行している。なお、内部主体は、すでに明治45（1912）年及び昭和32（1957）年の二度にわたり発掘調査・実測が行なわれている。今回の調査は、この内部主体の確認と、過去の調査で未確認の東・南・西側の墓塙プランの確認及び原位置にある小口石・側石・墓塙の実測を主たる目的として行った。

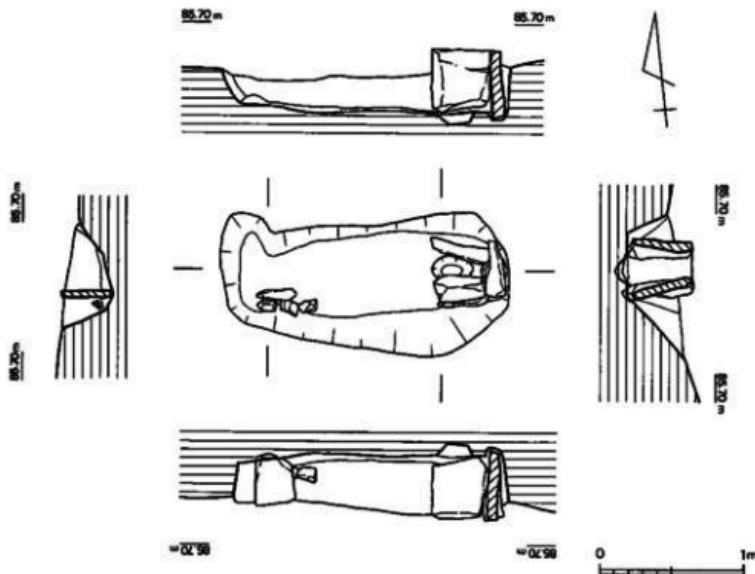
箱式石棺の原状について、昭和32（1957）年当時すでに全ての蓋石と大半の側石はその原位置を失い、かろうじて原位置を保っていたのは、東西の小口石2枚と側石5枚であり、側石5枚のうち4枚は両小口石に接する。この調査によって、本石棺の規模は内法で長さ160cm、幅12~25cm、深さは約25cmであることが確認されている。なお、墓塙については北側壁のみ確認されていたが、東西の小口壁及び南側壁については検出されていない。遺物は、昭和32（1957）年の調査時にも若干量出土しているが、大半は明治45（1912）年の調査時のものである。仿製鏡2（八乳鏡（径10.2cm）、六獣鏡（径7.1cm））、銅鏡片1、鉄刀片7、鉄劍（全長40.5cm）1、鉄片1、勾玉2（碧玉製1、硬玉製1）、管玉15（碧玉製）、算盤玉2（紅メノウ製）、小玉96（ガラス製、いずれもルリ色）が出土している。これらの出土遺物からみて、本古



第6図 須賀谷第1号古墳周溝内出土  
土器実測図（1：3）

墳の築造年代は5世紀後半を中心とした時期とされる。

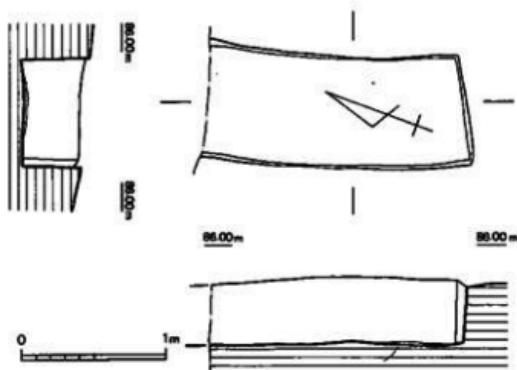
次に、今回の調査の結果原位置を保っていたのは、東小口石、東端の南側石、東端の北側石、そして西小口寄りの南側石1枚（この側石には3個の5cm大の角礫を裏込めとして用いていた）、以上の4枚のみであった。東小口部の状態は、八の字状に小口が穿まる南北両側石の側端面に東小口石をあてがっており、昭和32（1957）年の調査の成果のごとく、本箱式石棺の小口部における小口石と側石の組み方は、のごとくであった。次に、墓塚について、東・南・西辺ともに明確にすることができた。北辺についての現状における規模は長さ199cm、幅68~98cm、深さ15~38cmの一級掘りで、平面隅丸長方形を呈する。なお、今回の調査では遺物は出していない。



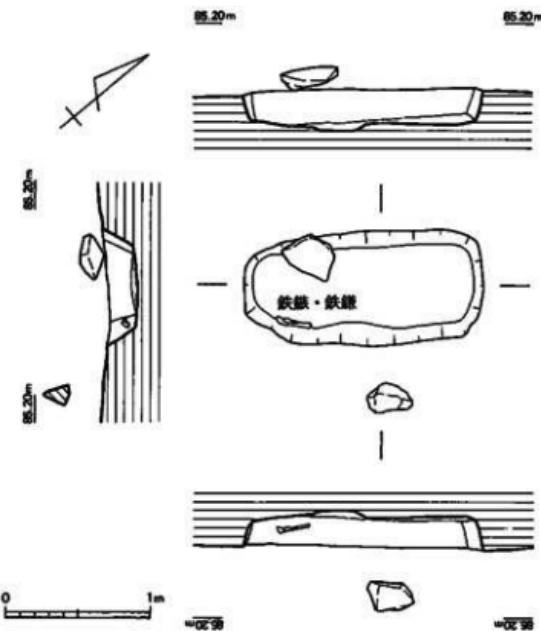
第7図 須賀谷第1号古墳主体部実測図(1:40)

#### その他の遺構

a. SK 1 (第8図、図版5 a) 墳頂部中央やや南寄りで検出した長方形の土塁で、内部主体の南方約3.3mの距離にある。長軸方位はN11°Wで、ほぼ尾根主軸に沿っている。西小口壁を擾乱塙で壊されており、現存規模は長さ180cm、幅76~80cm、深さ37~45cmである。



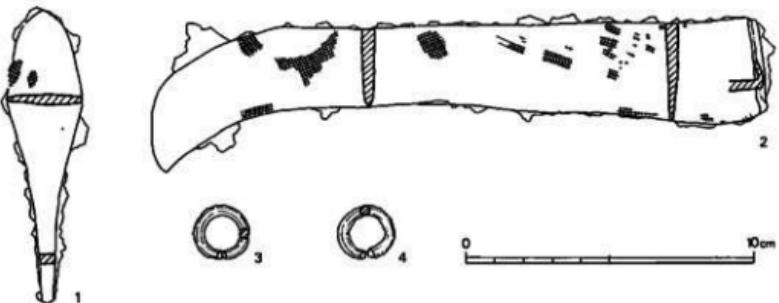
第8図 須賀谷古墳群SK 1実測図(1:40)



第9図 須賀谷古墳群SK 2実測図(1:40)

b. SK 2 (第9図、図版3 b) 墳丘背後の周溝底面から掘りこまれた土塙墓で、平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方位はN40°Eで、ほぼ尾根主軸に直交する。規模は、長さ165cm、幅47~80cm、深さ18~21cmである。なお、土塙の内外から30~40cm大の角環2個が出土している。1つは、南小口寄りの西側壁から土塙内部に落ちこんだ状態で検出した。他の1つは、東側壁中央から約30cm離れ、周溝底面から約25cm浮いた状態にあった。これらの角環はいずれもSK 2の棺構造に密接な関連性をもつものと考えられる。

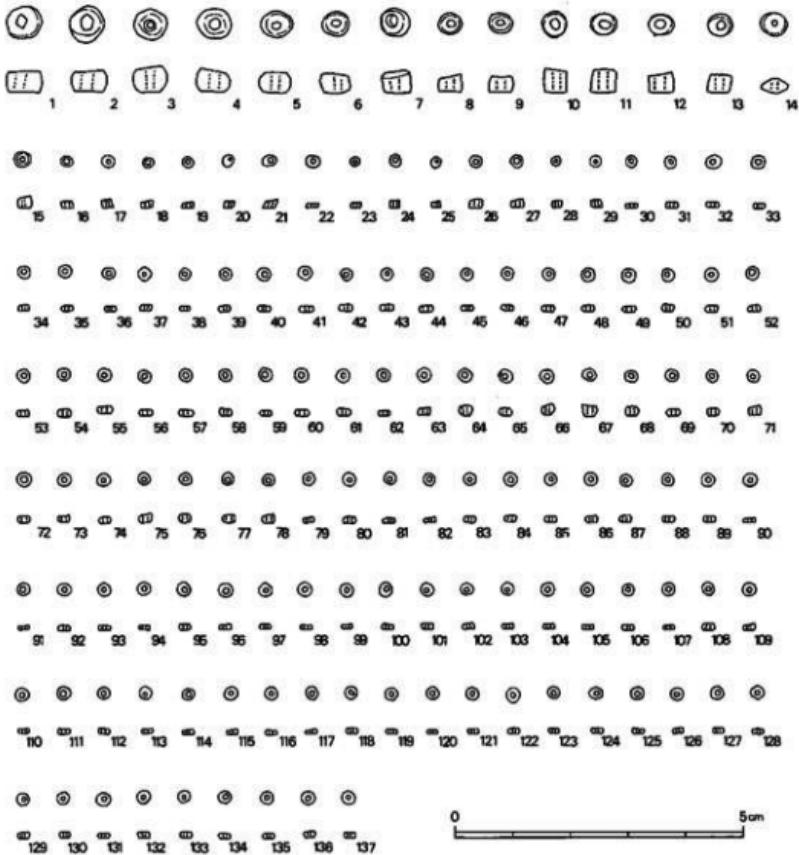
SK 2から出土した遺物としては、鉄鎌1・鉄鎌1・金環2・ガラス小玉約140がある。このうち、鉄鎌と鉄鎌は南小口寄りの東側壁際で重なり合って出土した。いずれもその先端(切先)を南小口側に向けていた。鉄鎌(第10図1)は、柳葉形を呈する。先端から3.2cmの辺りに最も幅広の部分があり、そこから若干内湾気味に少しづつ幅狭になりながら茎に続く。長さ10.2cm、身幅(最大幅)2.5cm、茎幅(先端)0.4cm、身厚0.4cm、茎厚0.3cmである。鎌身に部分的に布が付着するが、これは鉄鎌に付着する布の残片である。鉄鎌(第10図2)は、先端が刃部側に湾曲する曲刀のもので、長さ21.3cm、身幅は先端で2.6cm、中央で2.8cm、基部で3.6cmである。背部の厚さは4.5~6.0mmである。折り返しは刃部に対して若干鈍角に折り曲げている。また、身全体に布目痕が顕著で、布に包んで埋納されていたものと考えられる。金環(第10図3・4)は、いずれも銅芯(3は断面正円形、4は断面方形)金張りである。金箔の残存状況はいずれもかなり良く、発色の度合いも良好である。3はほぼ円形を呈し、外法径1.85~1.95cm、断面径0.35cmである。銅芯の両端は隙間なくあわせている。4は若干矩形を呈する円形で、外法径1.85~1.95cm、断面径0.35cmである。銅芯の両端は、若干の隙間をもつ。3・4ともに銹の色調は淡緑色である。小玉(第11図)はいずれもガラス製である。総数137点を数え、その径・形態の差違により大きくI~IV類に分類し、各類型をさらに1~4に細分できる。大きさは、径8mm前後のもの(大形品)、径4~6mm程度のもの(中形品)、径2~4mm程度のもの(小形品)、径2mm前後のもの(極小形品)に分けられる。次に、形態的には主にその縦断面形を指標として分類する。すなわち、胸部の張り具合、上下両端面の縁辺の状況(丸味をもつ、鋭い)などであり、次のように形態1~6に分類できる。



第10図 須賀谷古墳群SK 2出土鉄器・金環実測図(1:2)

第1表 須賀谷古墳群出土小玉類型一覧表

類型	I	II 1	II 2	II 3	II 4	III 1	III 2	III 3	III 4	III 5	IV 1	IV 2	IV 3
形態	大形	中形	中形	中形	中形	小形	小形	小形	小形	小形	極小	極小	極小
	4	1	3	4	6	1	2	3	4	5	1	2	5



第11図 須賀谷古墳群SK 2出土玉類実測図(1:1)

第2表 須賀谷古墳群SK2出土小玉分類表

類型	I	II 1	II 2	II 3	II 4	III 1	III 2	III 3	III 4	III 5	IV 1	IV 2	IV 3
色調		濃紺 淡紺	濃紺 淡紺	紺 淡紺	紺		淡紺				濃紺	濃紺 紺	淡青緑 濃紺 淡緑
点数	0	4	4	5	1	0	1	0	0	0	9	5	108

形態1……管を輪切りにしたような形状のもので、胸部が張らず直線的なもの。端面の縁辺は鋭い。

形態2……形態1に類似するが、端面の縁辺が若干丸味をおびるもの。

形態3……胴部が張り、上下両端に広い平坦面をもつもの。

形態4……胴部が顕著に丸味をおびるもの。

形態5……径に対して厚さの数値がかなり低く、きわめてうすいもので、胸部は丸味をおびるもの。

形態6……算盤玉状のもの。

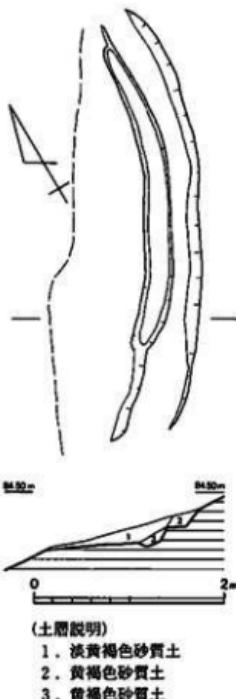
以上、径による分類と形態による分類と併せて分類したもののがI～IV類である(第1表)。

SK2出土の小玉について、類型別では径2mm前後のIV3類がその大半を占める(108例、78.8%)。径は最大6mm、最小1.5mmで大半は2mm前後である。厚さは1mm前後のものを中心に、最大4.6mm、最小約0.7mmである。孔径は0.6mm前後のものをを中心に、最大2.5mm、最小約0.4mmである。色調は淡青緑色のものが大半を占め、そのほかに紺色系統(淡紺色・濃紺色・紺色)と淡緑色のものがある(第2表)。

c. SX3(第12図、図版5b) 墳丘西斜面で検出した住居跡状造構で、南北4.5m、東西1.65mの規模で、円形プランをもつと考えられ、壁高5～17cm、壁溝の幅14～28cm、深さ2～14cmである。遺物は全く出土していない。

(註)

本村豪章「広島県安芸郡温品須賀谷古墳調査報告」「芸備地方史研究」第34号 昭和35(1960)年。



第12図 須賀谷古墳群  
SX3実測図(1:60)



### 3. 第2号古墳

#### 調査前の状況（第3図、図版1 b）

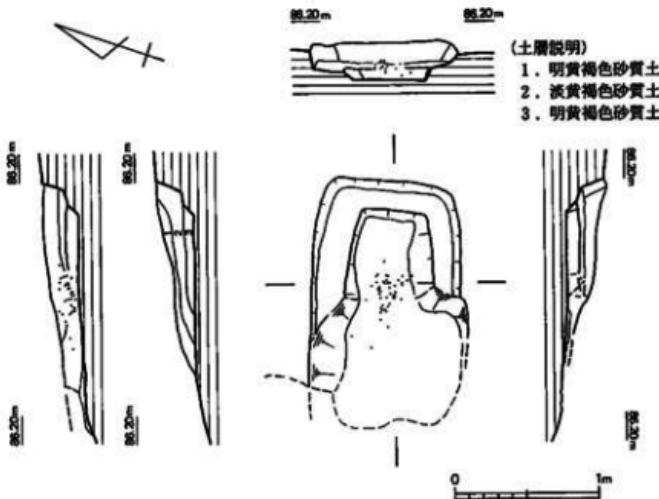
第2号古墳は、鞍部を介して第1号古墳の背後すなわち尾根の基部側にある。調査前の印象では、北側・南側は尾根鞍部があるために比較的墳端を捉えやすかった。西・東斜面はそのまま急峻な自然斜面に続くために墳端を捉えにくかったが、幾分傾斜が急になる88.25mの等高線の付近を墳端と考え、南北約14m、東西約10mの楕円形を呈する円墳と考えられた。墳頂には、南北6m、東西4mの楕円形を呈する平坦面があり、最高所の標高86m強である。

#### 墳丘（第4・5図、図版6 a）

墳丘の東・西斜面は、いずれも墳端を明らかにしない。墳丘の南北の墳端は、2つの周溝の存在により明らかであり、南北の墳丘規模は約14mとなる。東西の墳丘規模は、これらの周溝底面と同一標高（84.75～85.25m）の付近を墳幅と考えると、ほぼ10mの規模をもつと考えられる。このことから、墳形は、不整長円形を呈しているといえる。なお、墳頂には比較的広い平坦面が認められ、東西断面は台形状を呈する。また、墳丘の東斜面には植林に伴う溝状の擾乱塗が存在する。

#### 周溝（第4・5図、図版6 a・6 b）

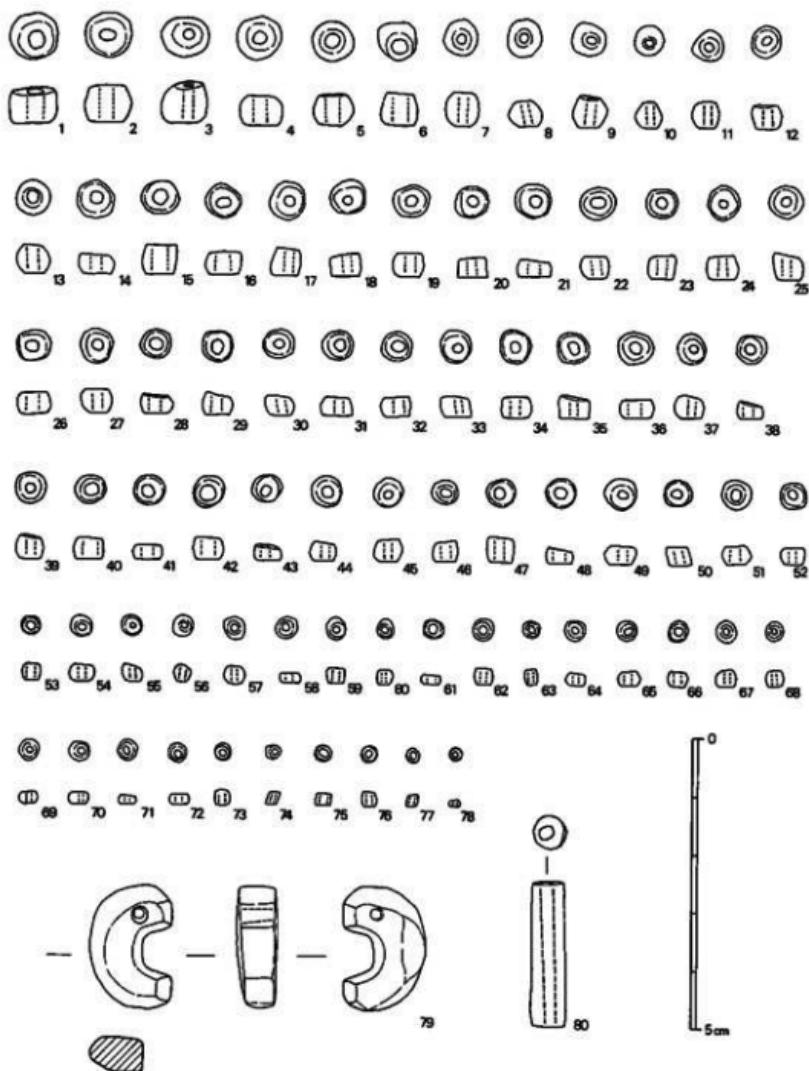
墳丘背後のゆるやかな尾根鞍部を掘りこんで造られた直線的な溝で、長さ4.4m、上端幅1.0～2.1m、下端幅0.9～1.0m、深さは最も深い箇所で0.39mである。横断面形は多少の凹凸はあるもののほぼ逆台形を呈し、溝底面もほぼ平坦である。両端で屈曲して急峻な自然斜



第13図 須賀谷第2号古墳第1主体部実測図(1:40)ドットは玉類を示す



のII 2類が中心で(41例, 53%), 他にII 1・III 3・III 4類がやや目立つ存在である。径は最大8.3mm, 最小1.8mmで2~4mm程度の小形品と4~6mm程度の中形品が多い。厚さは最大7



第14図 須賀谷第2号古墳第1主体部出土玉類実測図(1:1)

第5表 須賀谷第2号古墳第1主体部出土小玉分類表

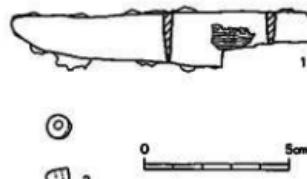
類型	I	II 1	II 2	II 3	II 4	III 1	III 2	III 3	III 4	III 5	IV 1	IV 2	IV 3
色調	濃紺 紺 濃青		紺 淡紺 暗青		橙 紺 濃紺 黒紫		濃青 淡青	紺	紺	濃青緑		紺	淡青緑
点数	4	0	41	10	0	3	2	7	7	2	0	1	1

mm、最小1mmで、2~4mmのものが主体を占める。孔径は最大4.7mm、最小0.7mmで、2~3.5mmのものが中心である。色調は、紺色・濃紺色・濃青色・暗青色・淡青緑色・黒紫色・橙色とバラエティに富むが、その主体は紺系統のものである。橙色の小玉が5例存在する点が特長である。SK2出土玉類と比較すると、SK2の主体を占めた極小形品のIV類が僅か2例しかみられない点、また、SK2では皆無であった径8mm前後の大形品が4例みられるなど類型別の組成に大きな差違がみられるものの、ガラス小玉そのものの質・色調・製作技法などはほぼ同一と考えられる(第4表・第5表)。

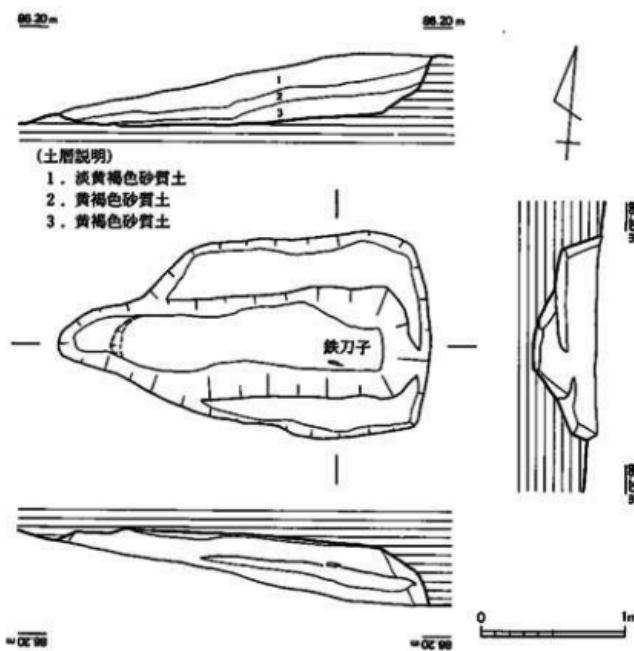
勾玉(第14図79)は、全体にうすく緑色をおびた淡黄白色を呈し、長さ21mm、幅(中央部)14mm、厚さ(中央部)9mm、孔径1.5~3.0mmである。鈍い光沢をもちヒスイ製かと考えられ、穿孔は一方向からのみ行われている。管玉(第14図80)は、淡青緑色を呈し、碧玉製と考えられる。長さ25mm、径6mm、孔径2mm。穿孔は一方向からのみ行われていると考えられる。

b. 第2主体部(第16図、図版8a) 第1主体部の南方1mの位置にある。長軸方位はN86°Eで、尾根主軸に直交する。西小口側約程度が部分的に流失しており、原状では平面限丸長方形の二重土塗と考えられる。現存規模は、上段墓塗が長さ約200cm、最大幅139cm、深さ7~30cm、下段墓塗は平面不整限丸長方形を呈し、長さ251cm、幅69~77cm、深さ5.5~24.5cmである。下段墓塗の底面は、水平ではなくかなり西斜面側に下傾している。遺物は、下段墓塗の東小口寄りの位置で鉄刀子1が出土しているほか、管玉片が出土した。

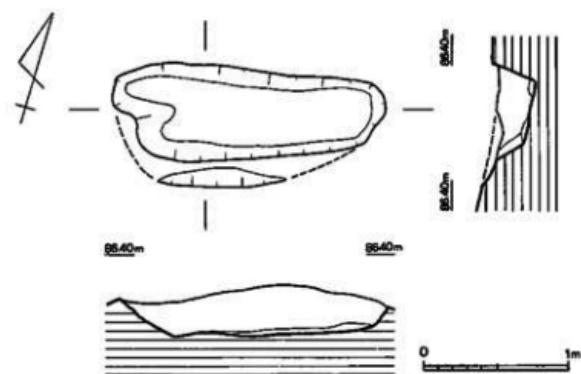
鉄刀子(第15図1)は、全長10.4cm、刃部長7.3cm、茎長3.1cm、刃部幅は切先部で0.7cm、中央部で1.6cm、関部で1.9cm、茎幅は関部で1.35cm、先端で1.0cm、背部の厚さは刃部で0.35cm、茎の部分で0.3cmである。切先は丸味をおびる。関は、片側で鋭く直角的に切れこんでいる。管玉片(第15図2)は、上下両端を研磨して小玉としたもので、径3.5~4mm、孔径1mmである。淡青緑色を呈し、碧玉製と思われる。



第15図 須賀谷第2号古墳第2主体部  
出土鉄器・玉類実測図(1:2,  
1:1)



第16図 須賀谷第2号古墳第2主体部実測図(1:40)



第17図 須賀谷古墳群SK4実測図(1:40)

#### 4. SK 4 (第17図、図版9a)

SK 4は、第2号古墳の周溝から約2m南方の尾根頂部で検出した土塙である。長軸方位はN73.5°Eで、尾根主軸に直交する。平面形は、不整隅丸長方形を呈する。上段墓塙の大部分は流失しており、南側壁を僅かに残すのみである。この僅かに残る上段墓塙の深さは、13.5cmである。下段墓塙は、長さ189cm、幅41~67cm、深さ12~30cmである。底面は、ほぼ水平で平坦である。塙内からの出土遺物としては、土師器細片が数点ある。

#### 5. まとめ

**立地** 須賀谷古墳群は、広島市東郊の呉婆々字山塊から西方に派生した、標高86m、眼下に望む平野からの比高70~80mの小尾根上に立地する2基の古墳からなる。

**墳丘構造** 2基の古墳は、いずれも墳丘背後の尾根をカットして直線的な周溝を設けたのみで明確な墳裾をもたないが、第1号古墳は西北一東南13m×東北一西南11mの平面不整円形の円墳であり、第2号古墳は南北14m×東西10mの平面不整長円形を呈する。

**内部主体とその他の埋葬施設** 内部主体については、第1号古墳が箱式石棺であり、第2号古墳は土塙墓（二重土塙）である。これら内部主体とは別に、墳丘外に2基の土塙墓（SK2・SK4）が存在する。SK2は第1号古墳の周溝底面で、SK4は第2号古墳の周溝の外方の尾根頂部で検出した。

第1号古墳の内部主体（箱式石棺）は、墳頂部の北に偏った位置にある。本古墳については墳頂部中央が大きく攢乱をうけており、箱式石棺以外の中心的な内部主体の存否については明らかではない。なお、SK1については出土遺物が皆無であり、その土塙の形態等の面でも埋葬施設であるとは断言できない。次に、箱式石棺の被葬者とSK2の被葬者との関係については、SK2が墳丘外の周溝底面に第1号古墳築造時あるいは築造後それほど時間を隔てないで掘りこまれていること、比較的豊富な副葬品を有していたことなど両者が何らかの強い紐帯関係（血縁関係を含む）にあったことをうかがわせる。また、第2号古墳の内部主体2基については、両者が墳頂部からやや南斜面にさがった位置に相接するように並行して造られていることから、比較的近い時期に相次いで埋葬されたものと想定される。さらに、両主体部を土塙の規模・出土遺物について比較してみると、土塙規模については第2主体部が大きく、第1主体部が小形である。出土遺物については、第1主体部は勾玉・管玉・ガラス小玉の玉類のみであるのに対して、第2主体部では鉄刀子・管玉片が出土している。これらのことから、両主体部の被葬者は近親関係にあり、しかも、第2主体部が第2号古墳の中心的な内部主体であることが考えられる。また、第2号古墳の周溝外にあるSK4については、第2号古墳の2つの主体部の被葬者たちと何らかの血縁関係を含めた紐帯関係にある人物の埋葬施設と想定される。

**遺物等からみた古墳群の築造年代** まず、第1号古墳については箱式石棺に伴う遺物として、仿製鏡（八乳鏡・六獸鏡）、武器（鉄刀・鉄剣）、装身具（銅鏡・勾玉・管玉・算盤玉・ガラス

小玉)があり、5世紀後半を中心とした時期のものとされている。SK2からは、農工具(鉄鎌), 武器(鉄鎌), 装身具(金環・ガラス小玉)が出土しており, 曲刃鎌・柳葉形鉄鎌の存在などから5世紀中葉を中心とした時期をあてることができよう。また, 第1号古墳の周溝埋土上層を中心として土師器(複合口縁壺)の破片が出土している。この複合口縁壺は, 若干外反氣味であるがほぼ垂直に立ちあがる口縁部, 短かく強く屈曲する頸部, 平底の底部(外底面には木葉痕が認められる)などの形態上の諸特徴から5世紀中葉を中心とした時期に属すると考えられる。この壺については, 本来第1号古墳の墳丘上に置かれていたものが, 周溝がある程度埋積した段階で周溝内に転落したものと考えられ, 第1号古墳築造に伴うものである。これらのことから, 第1号古墳の築造年代は5世紀中葉～後葉を中心とした時期に求めることができる。第2号古墳については時期を決定する遺物に乏しいが, 第1主体部出土のガラス小玉が第1号古墳のSK2のガラス小玉と形態・色調などの面で酷似していること及び第2主体部出土の鉄刀子が片闊(刃闊)であることなどから, その築造年代を大まかに5世紀代ととらえることができよう。ただし, 古墳の立地状況から第2号古墳は, 第1号古墳に後出すると考えられることから, 第2号古墳の築造年代は5世紀後半を中心とした時期に求めることができる。

以上のように, 須賀谷古墳群は5世紀中葉～後葉を中心とした時期に, 西方に派生した細尾根上に築造された小規模な古墳群であるが, 特に第1号古墳については質・量ともに比較的豊富な副葬品をもつ内部主体を有しており, 広島湾岸東部の小地域(府中大川流域)における一級長あるいはこれに準ずる有力者を被葬者として考えることができよう。

(註)

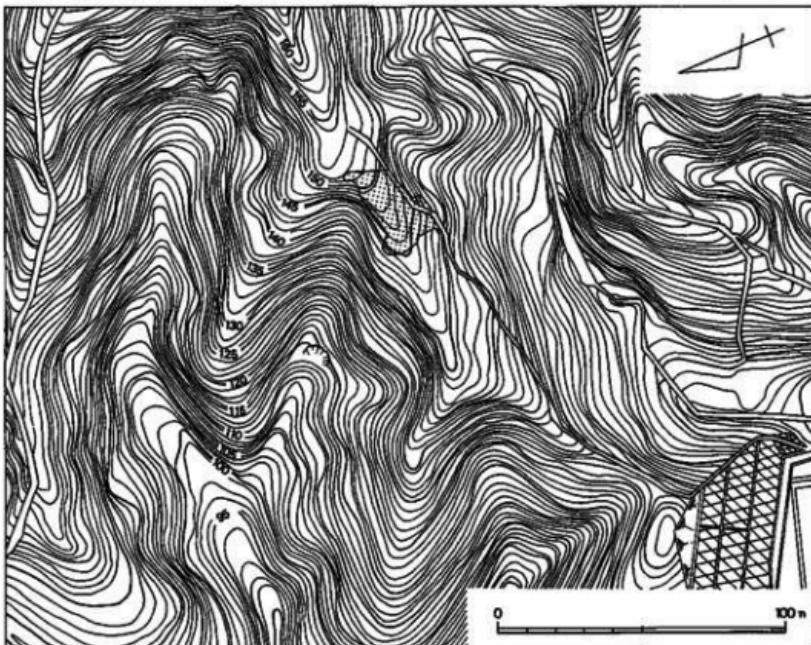
本村豪章「広島県安芸郡温品須賀谷古墳調査報告」『芸備地方史研究』第34号 昭和35(1960)年。

## IV 畳谷東遺跡

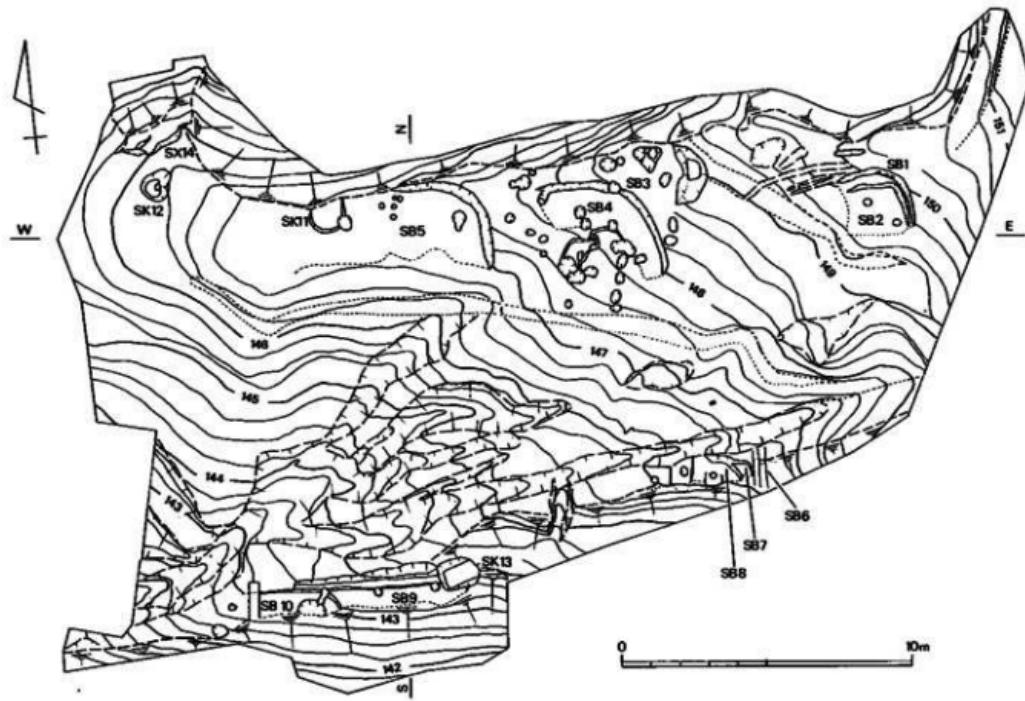
### 1. 調査の概要

畠谷東遺跡は、広島市東区温品字畠谷371, 402, 403に所在する弥生時代後期の集落跡である。本遺跡は、南流する府中大川の東岸、標高682mの具狭々宇山山頂から西方にのびる小尾根上に立地する。尾根頂部の北側は真近まで崖状の急斜面がありこんでおり、遺構は、東から西にのびる標高145～151mの尾根頂部と、この尾根頂部から10～30度の角度で下る南斜面下方（標高143～147m）の2箇所に存在する。遺構は、いずれにしても南斜面に深く刻みこまれた自然流水の流路の存在が示すように、花崗岩バイラン土という地山の浸蝕のうけやすさが大きく原因して、自然流失・擾乱が著しく原状をそこねている。

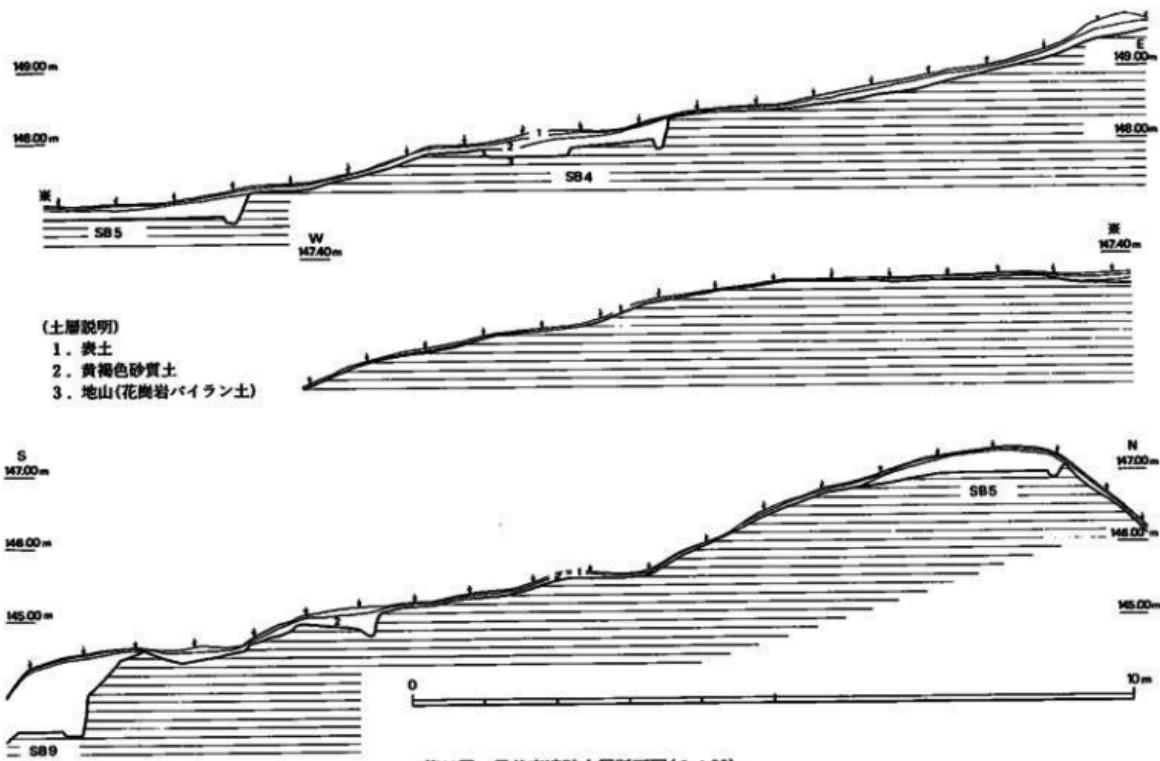
遺構の内訳は、竪穴式住居跡10軒・土塹3基・性格不明遺構1である。このうち、尾根頂部には竪穴式住居跡5軒（SB1～SB5）・土塹2基（SK11・SK12）・性格不明遺構1（SX14）が、また、南斜面下方には竪穴式住居跡5軒（SB6～SB10）・土塹1基（S



第18図 畠谷東遺跡周辺地形図(1:2,000) アミ目は調査区を示す



第19図 畠谷東遺跡遺構配置図(1:200)



第20図 叠谷東道路土層断面図(1 : 80)

K13) が各々存在する。出土遺物としては、弥生土器(壺・壺・鉢・高杯・手捏ね土器)・土製品・石器・鉄器がある。

調査は、尾根主軸に沿う基準線を任意に設定し、この基準線をもとに調査区全体に  $5 \times 5$  m を一単位とするメッシュをかぶせ、このメッシュ単位で調査をすすめた。

## 2. 造構と遺物

### (1) 壁穴式住居跡

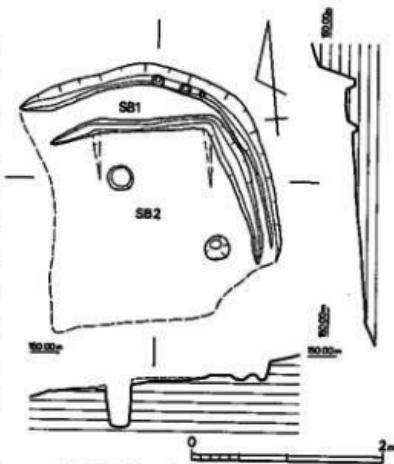
#### S B 1・S B 2 (第21図、図版11b)

東から西にむかって緩かに下傾する尾根頂部から僅かに下った南斜面上端に位置する住居跡で、2軒が重複している。住居跡の中でも最高所(標高150m)に位置する。

S B 1 は S B 2 に外接するように存在し、その西側が流失し原形の  $\frac{1}{2}$  程度を残す。残存する壁の描くカーブから推定して、平面形は円形を呈する住居跡と考えられる。壁高は、最も残りの良い箇所で 28cm で、壁溝は上端幅 10~25cm、深さは最深 6cm である。壁溝内には、径 6~12cm、深さ 4~8cm の小ビット 3 個が存在する。S B 2 は S B 1 に内接し、その東北コーナー部分を残す住居跡である。若干東辺の壁溝は外側にひろがり気味であるが、現状では北辺 1.7m、東辺 1.6m の規模をもつ平面形が方形を呈する住居跡である。壁は、S B 1 の床面によって削平され僅かに壁溝を残すにすぎない。壁溝の規模は、上端幅 10~24cm、深さは最深 10cm である。床面には計 2 個のビットが存在するが、S B 1・S B 2 のいずれの住居跡に属するかは判然としない。このビットの規模は、ともに径は 25cm で、深さは 27cm 及び 44cm である。なお、S B 1 と S B 2 の新旧関係については、S B 2 が古く、S B 1 が新しい。遺物としては、S B 1 から弥生土器が若干出土しているが、器種・時期等は不明である。

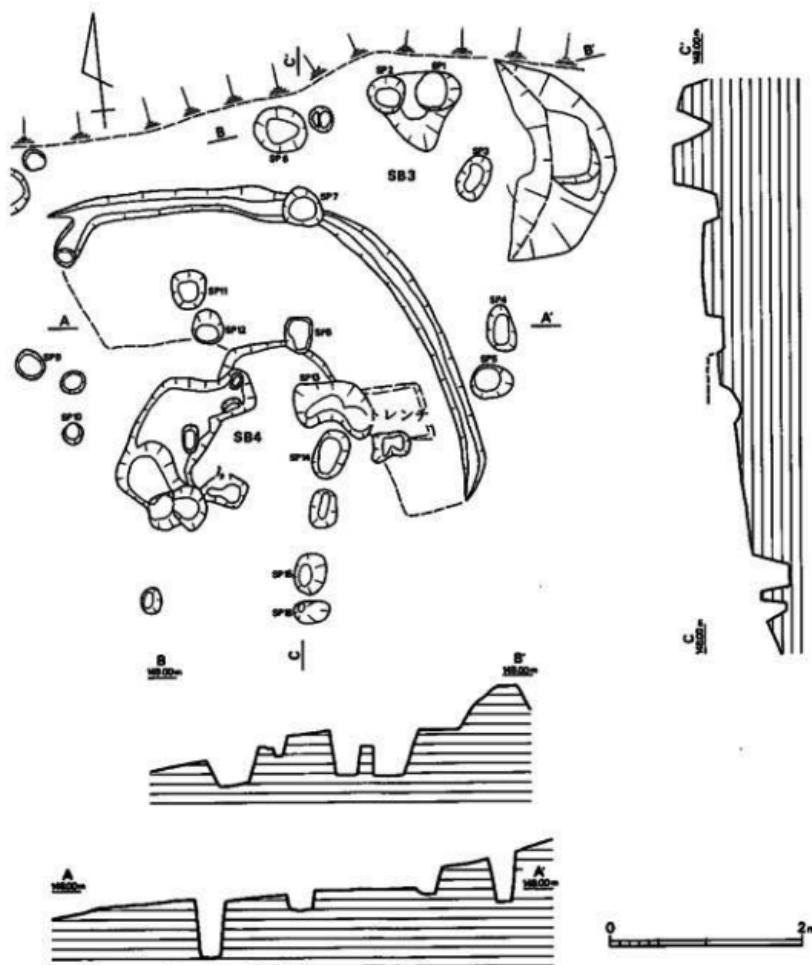
#### S B 3 (第22図、図版12a)

尾根頂部に位置する住居跡で、S B 1・S B 2 の西方 4.5m の距離にあり、S B 4 と重複している。S B 4 の北側、より高位の標高 148m の尾根頂部にあり、北は崖に臨む。床面・壁の大半を崖面及び自然流失により失っており、東壁を僅かに残すだけである。壁高は、最も残りの良好な箇所で 61cm である。壁面の中央に 1~2段の平坦面が認められるが、壁溝は認められない。南側の床面は S B 4 によって切られている。S B 3 床面上及び S B 4 床面上に、



第21図 豊谷東遺跡 S B 1・S B 2  
実測図(1:60)

S B 3 の柱穴と想定される 8 個のビット (S P 1 ~ S P 8) が存在する。これらのビットの規模は、S P 1 (長径 46cm, 短径 41cm, 深さ 48cm), S P 2 (長径 39cm, 短径 38cm, 深さ 48cm), S P 3 (長径 47cm, 短径 31cm, 深さ 62cm), S P 4 (長径 50cm, 短径 29cm, 深さ 51cm), S P 5 (長径 45cm, 短径 34cm, 深さ 40cm), S P 6 (長径 54cm, 短径 47cm, 深さ 44cm), S P 7 (長径 43



第22図 叠谷東遺跡 S B 3・S B 4 実測図 (1 : 60)

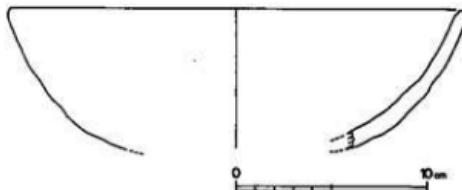
cm, 短径38cm, 深さ47cm), S P 8 (長径38cm, 短径28cm, 深さ20cm) である。本住居跡は、これら柱穴の配置状況からみて、方形ないし長方形に支柱を配列していたものと考える。また、住居跡の平面形については壁の残存状況が良好でないため不明である。住居跡に伴って弥生土器片若干が出土しているが、住居跡の所属時期は不明である。

#### S B 4 (第22図、図版12 a)

尾根頂部から南斜面にかけての傾斜変換線上の標高148mに位置する住居跡で、S B 3に南接し、その床面を掘りこんで造られている。西から南にかけて壁及び床面を大きく自然流失により失っており、原形の東北隅約 $\frac{1}{4}$ を残す。その残存する壁の描くカーブから推定して、本住居跡は平面形が円形を呈する住居跡である。壁高は、最も残りの良好な箇所で37cmである。壁溝は、上端幅16~34cm、深さは最深10cmである。床面には、柱穴と推定されるピットが20個程度存在する。これらのピットの規模は径20~50cm、深さ13~68cm程度である。このうち、主柱穴と考えられるピットはS P 9~S P 16の8個であり、これらの配置状況から考えて、本住居跡は円形に主柱を配置していたものと考えられる。しかも、その配置にはS P 9—S P 11—S P 13—S P 15と並ぶもの（柱間1.80~1.94m）と、その内側にS P 10—S P 12—S P 14—S P 16と並ぶもの（柱間1.66~1.74m）との2様が認められることから建て替えを1度行っている可能性が強い。各主柱穴の規模は、S P 9(長径33cm、短径27cm、深さ36cm), S P 10(長径22cm、短径20cm、深さ13cm), S P 11(長径40cm、短径36cm、深さ68cm), S P 12(長径36cm、短径32cm、深さ61cm), S P 13(長径60cm、短径36cm、深さ52cm), S P 14(長径53cm、短径36cm、深さ48cm), S P 15(長径43cm、短径32cm、深さ42cm), S P 16(長径38cm、短径26cm、深さ31cm)、である。これらの柱穴群に囲まれた床面中央には、不整長方形の浅い土塙が存在する。その規模は、長軸185cm、短軸110cm、深さ11~25cmである。この住居跡に伴って弥生土器片少量が出土しているが、その種類・時期等は不明である。

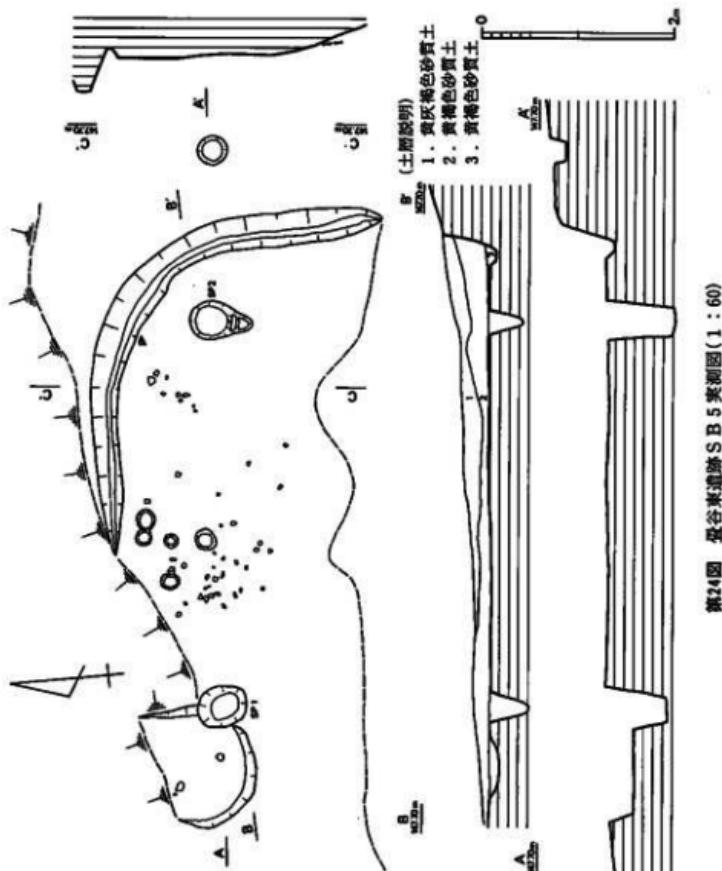
#### S B 5 (第24図、図版12 b)

S B 4 に西接して存在する住居跡で、標高147mの尾根頂部に位置する。北側は崖に接し、壁・床面の大半を自然流失によつて失っており、現状は、その東北隅 $\frac{1}{4}$ 程度の壁・壁溝と北側 $\frac{1}{4}$ 弱の床面が残存しているにすぎない。残存する壁の描くカーブから考えて、平面形は円形を呈する住居跡と推定される。壁高は最も残りの良い箇所で54cmである。壁溝の上



第23図 畠谷東遺跡SB 5出土土器実測図(1:3)

端幅は25~40cm、深さは最深11cmである。床面には主柱穴と思われるピット2個(S P 1・S P 2)が存在し、その配置状況からみて、本住居跡は方形に主柱を配列した4本柱の住居跡と推定される。主柱穴の規模は、S P 1(長径52cm、短径42cm、深さ71.5cm)、S P 2(長径65cm、短径41cm、深さ71.5cm)である。その柱間距離は約4mである。なお、西端のS K11との新旧関係は、S B 5が古く、S K11が新しい。西半の床面を中心に弥生後期の土器片がやまとまって出土しているが、大半は小片のため器形等不明である。第23図は鉢と思われ、この土器から本住居跡の所属時期は弥生後期と考えられる。

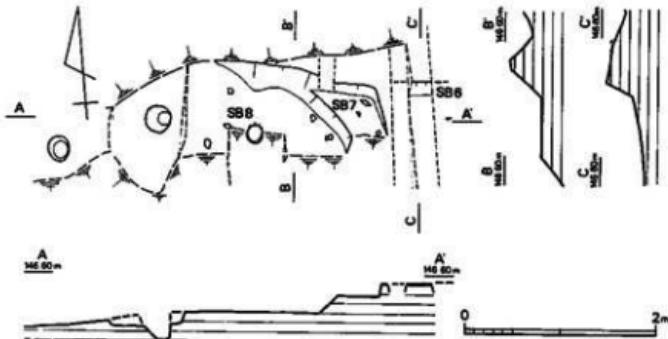


第24図 畠谷東遺跡S B 5実測図(1:60)

### SB 6・SB 7・SB 8 (第25図、図版13a)

東半南斜面の下端に位置する一群の住居跡で、尾根頂部に立地する住居跡群の真南6~7mの距離にある。北側を自然流水の流路で、南側は自然流失により各々大きく原形を失っており、南北0.5~1.1mの幅で壁・床面の一部を残すのみである(標高146~147m)。

SB 6は、土層観察によって、わずかにその存在を認め得た住居跡である。セクション・ベルトの東・西側をトレンチにより失っており、その規模・平面形については不明である。残存部分での壁高は29.5cmである。SB 7はその東北コーナー部分をわずかに残すにすぎず、西側はSB 8と重複する。残存部分での壁高は16cmをはかる。壁の屈曲の仕方から推定すると、平面方形の住居跡であろう。SB 8は住居跡群の西端に位置する住居跡で、SB 7同様その東北隅の壁をごくわずかに残す。残存部分での壁高は、39.5cmである。SB 7・SB 8の新旧関係については、SB 8が古くSB 7が新しい。なお、SB 8の床面上に径16~29cm、深さ21.5~25cmのピット3個が存在する。いずれもその底面の標高はほぼ同一であり、一つの住居跡のものと考えられるが、いずれの住居跡に伴うか判然としない。これらの住居跡に伴って弥生土器片が出土しているが、いずれも器種・時期等不明である。



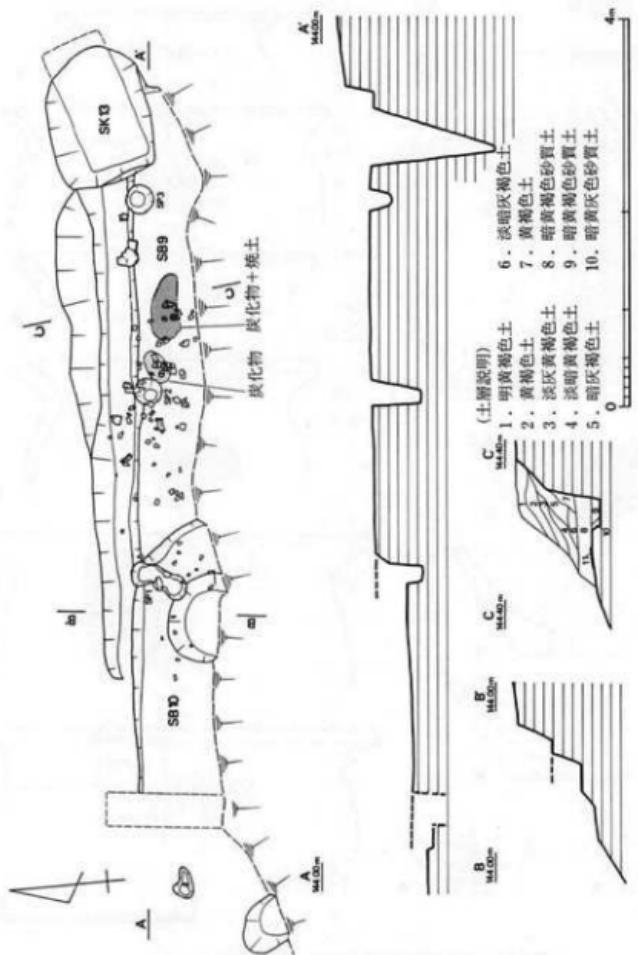
第25図 豊谷東遺跡SB 6・SB 7・SB 8実測図(1:60)

### SB 9・SB 10 (第26図、図版14a)

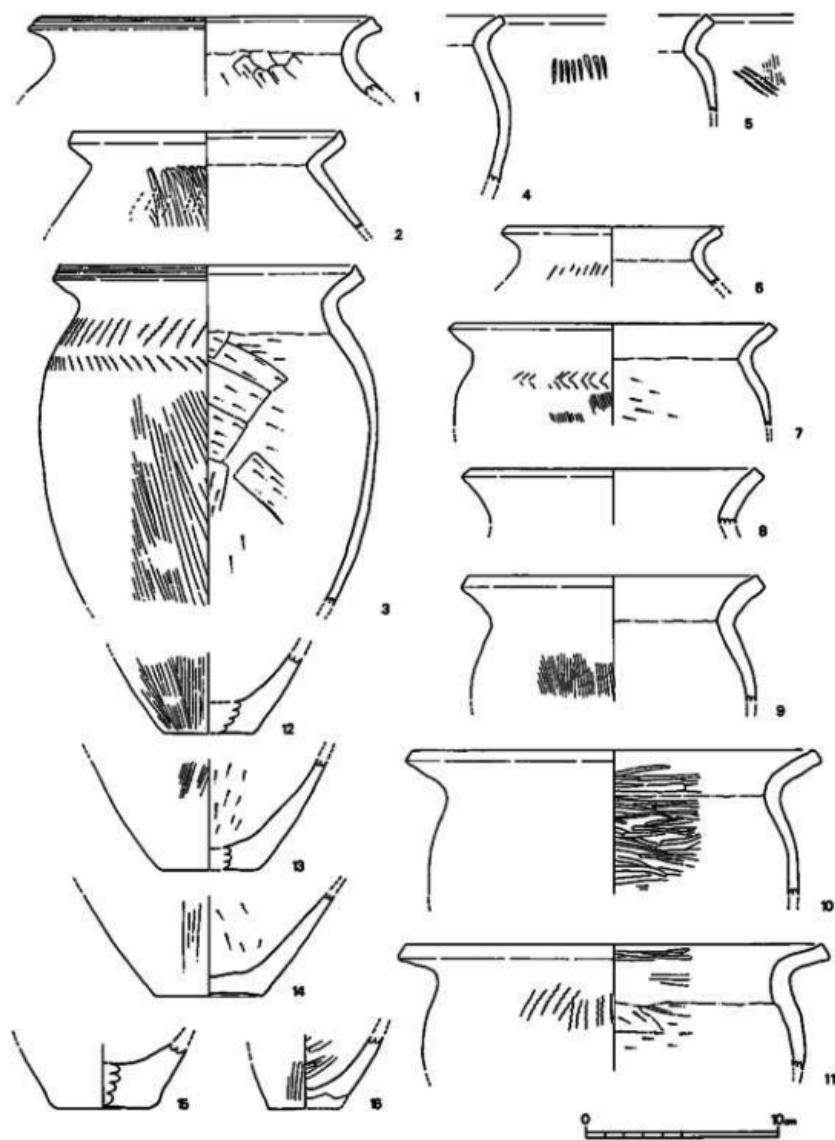
SB 6~SB 8と同じく南斜面下端に立地する住居跡で、その西半に位置する。尾根頂部に在るSB 5の真南約10mの距離にある。北側は、東から西に通る山道に接し、南側は、約40度の急斜面につらなる。住居跡のあるあたりの斜面の標高は、約143mである。

SB 9は西端部でSB 10と切り合い、東北コーナー部分はSK13によって切られている。西北コーナー部分は擾乱により失っている。現存規模は、東西6.3m、南北1.04~1.40mの方形ないしは隅丸方形の住居跡である。北辺については、一旦法面状に最大44cmほど地山を斜めに掘り込んだのち、垂直に掘りさげて住居の壁としている。壁高は、最も残りの良好な箇

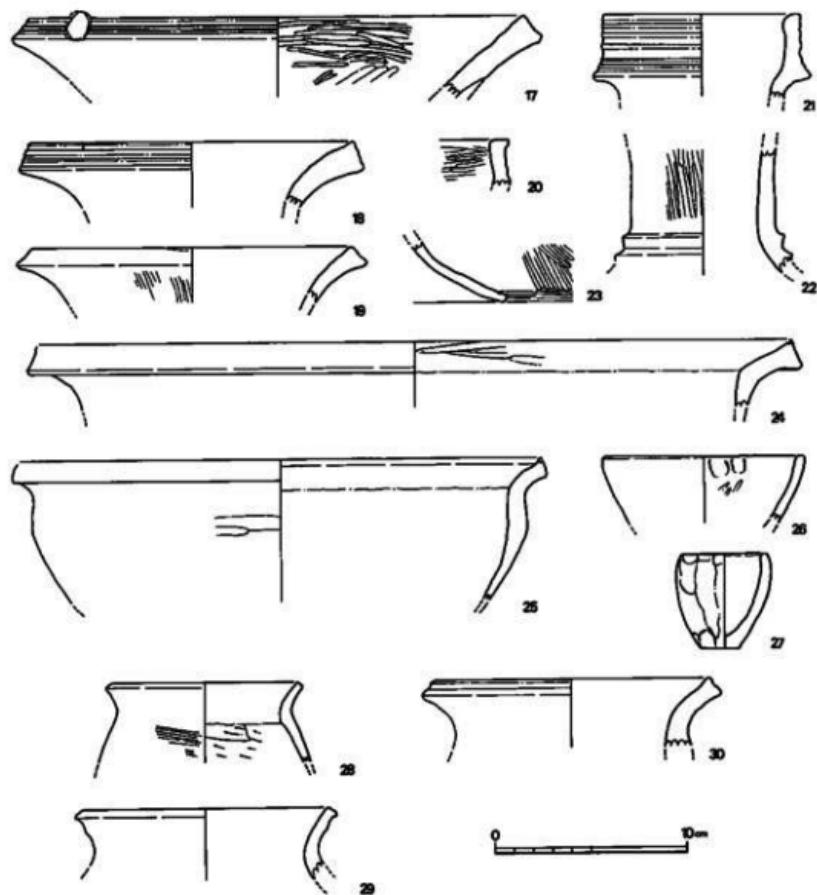
所で74cmである。壁溝は、上端幅35~45cm、深さ3.5cm~8cmである。床面には、この壁溝に近く東西方向に主柱穴と推定されるピット3個が並ぶ。これらのピットの規模は、S P 1(長径28cm、短径26cm、深さ48cm)、S P 2(長径29cm、短径26cm、深さ51cm)、S P 3(長径31cm、短径26cm、深さ47cm)である。その配置状況から、本住居跡は方形ないしは長方形(2間× $\alpha$ )に主柱を配置した住居跡で、柱間距離は1.86~2.02mである。なお、床面直上で炭化物あ



第25図 豊谷東遺跡 S B 9・S B 10実測図(1 : 60)



第27図 畠谷東遺跡SB 9出土土器実測図(1:3)



第28図 叠谷東遺跡SB 9・SB 10出土土器実測図(1:3)

るいは炭化物+焼土のひろがりが2箇所存在する。前者が34×22cm、後者が66×32cmの規模である。この炭化物+焼土の集中部の周辺で、弥生後期の土器片が集中的に出土した。

出土遺物としては、弥生土器及び鉄器がある。弥生土器（第27図1～第28図27）は甕・壺・鉢・高杯・手捏ね土器がある。甕は口縁の形態により大きく3形態にわけられるが、凹線文および口縁端部の肥厚のいずれもが消失した3類に属するものが頗著である。壺は口径を大きく開き、部厚い端面に凹線文あるいは凹線状の横ナデ調整を施すものがやや目立つが、第28図20・21のように複合口縁をもつもの、あるいは第28図22のように頸部に断面三角形の凸帯をもつ長頸壺がある。鉄器（第33図1）は、長さ3.9cm、幅0.9～1.4cm、厚さ0.5cmで、その用途は不明である。

S B10はS B9の西端部と切り合う住居跡で、その床面はS B9のそれより30～40cm下位にある。北西コーナー部分及び西壁は擾乱により原形を失っている。現存規模は東西3.78m、南北0.88mである。壁高は、最も残りの良好な箇所で35cmである。壁溝及び支柱穴と推定されるピットは見られない。床面やや東寄りの位置で、炉跡かと思われる浅い土塙を検出した。その規模は径約26cm、深さ18cmで、平面形はほぼ

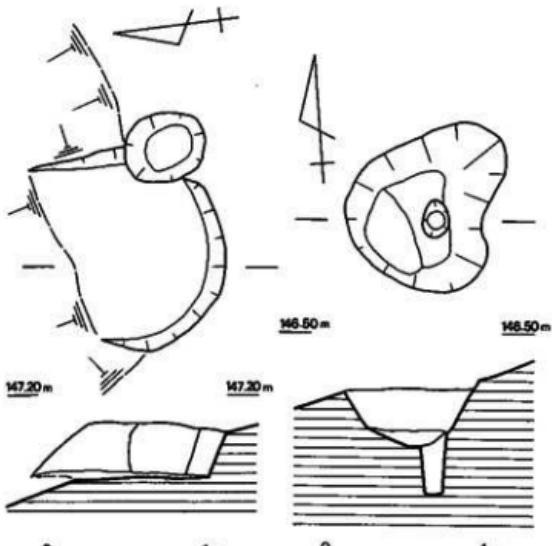
円形を呈する。S B10から  
らは弥生後期の土器片が  
出土している。甕（第28  
図28～30）が主体で、いず  
れも口縁端部は肥厚せず、  
端面が平坦なもので後述  
の3類の甕に属する。

S B9とS B10の新旧  
関係は、S B10が古くS  
B9が新しい。これらの  
住居跡の所属時期は、ほ  
ぼ弥生後期中葉と推定さ  
れる。

## (2) 土塙

S K11（第29図、国版  
13b）

調査区西北隅の尾根頂  
部に位置する土塙で、S



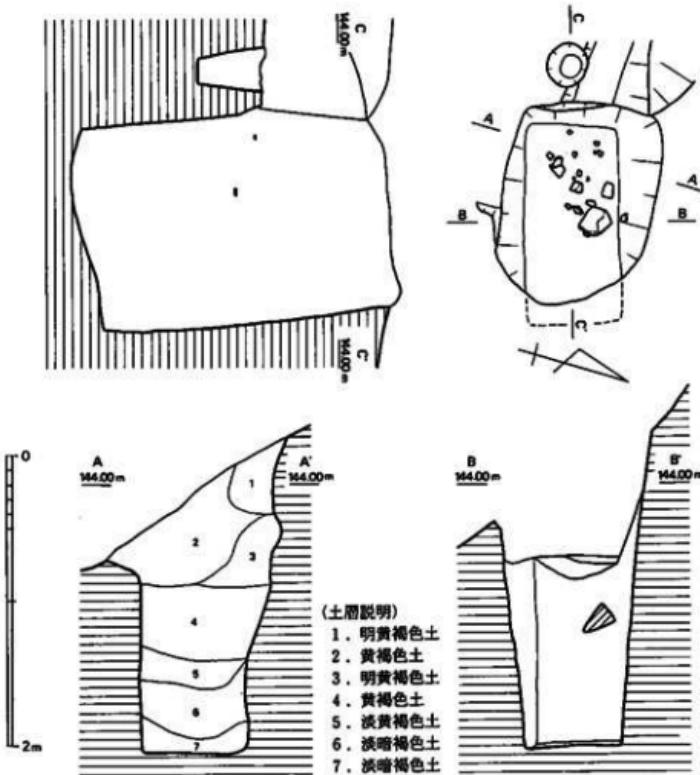
第29図 畠谷東遺跡 S K11  
実測図(1:40)

第30図 畠谷東遺跡 S K12  
実測図(1:40)

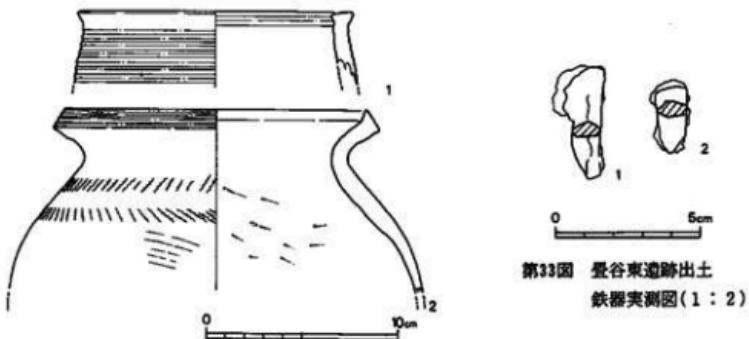
B 5・S K12の西方約5m, S X14の南方約0.6mの距離にある(標高146m)。平面形は不整円形で、長径120cm、短径98cm、深さ42cmの規模をもつ。底面は、平坦でなく椀底状を呈している。底面中央に、長径25cm、短径18cm、深さ38cmのピット1が掘り込まれている。出土遺物はない。

#### S K12 (第30図、図版12 b)

調査区北端中央の尾根頂部に立地する土塙で、S B 5の床面を掘り込んで造られている。土塙の北半はすでに流失しており、その現存規模は東西128cm、南北123cm、深さは最も残りの良好な箇所で28cmである。平面形は、円形ないしは橢円形と考えられる。その底面は平坦で、断面逆台形である。S B 5との新旧関係は、S B 5が古くS K12が新しい。塙内からは弥生



第31図 登谷東遺跡SK13実測図(1:40)

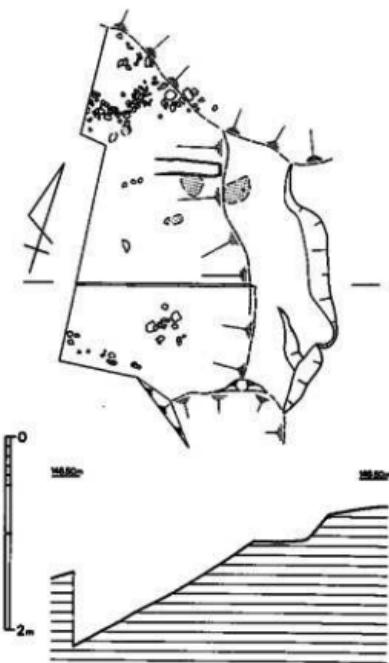


第32図 疊谷東遺跡SK13出土土器  
実測図(1:3)

土器片若干が出土しているが、器形・時期等不明である。

#### SK13 (第31図、図版14b)

調査区南端西半の急斜面に掘り込まれた土塙で、SB9の東北コーナー部分を壊して造られている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸140cm、短軸51cm、深さ127~216cmである。東辺の底面が若干外側にふくらむ袋状を呈する。底面は、東辺が最も高く西辺にむかって13~22cm程度下傾する。西辺から30cmほど東に寄ったあたりの底面が最も低く、若干凹む。塙内の土層はほぼ水平に堆積しており、底面に44~66cmほど淡暗褐色土が堆積し、その上には黄褐色系統の花崗岩バイラン土壤が堆積していた。塙内からは、少量の弥生後期の土器(第32図)・鉄器が出土している。鉄器(第33図2)は長さ2.25cm、幅0.9~1.1cm、厚さ0.5cmで、用途は不明である。SB9とSK13との新旧関係は、SB9が古くSK13が新しいと考えられ、SK13の所属時期はその出土土器の諸特徴から、弥生後期中葉頃と推定できる。



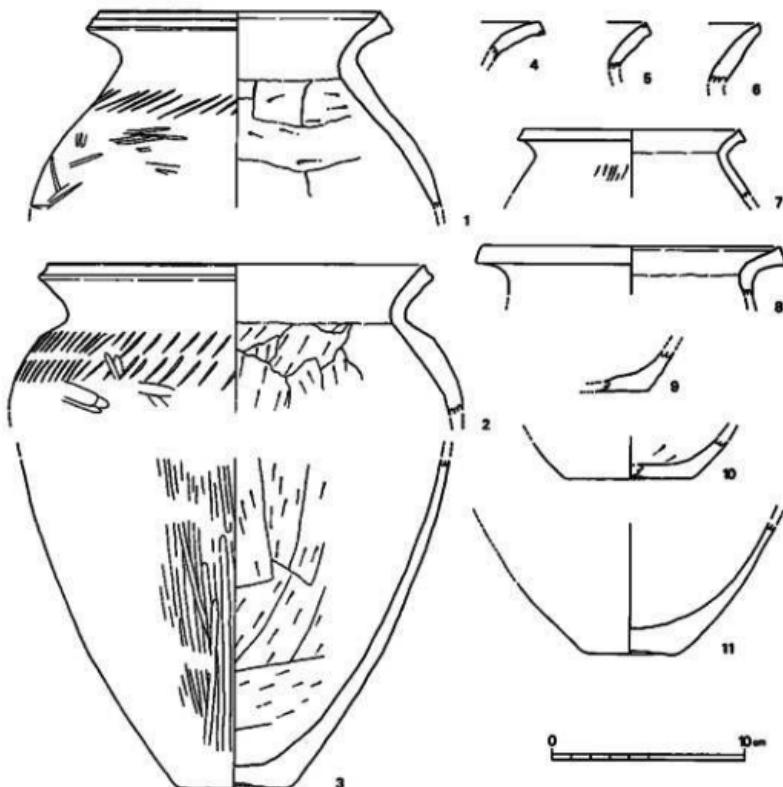
第34図 疊谷東遺跡SK13実測図(1:60)  
アミ目は貝層を示す

(3) その他の遺構・遺物

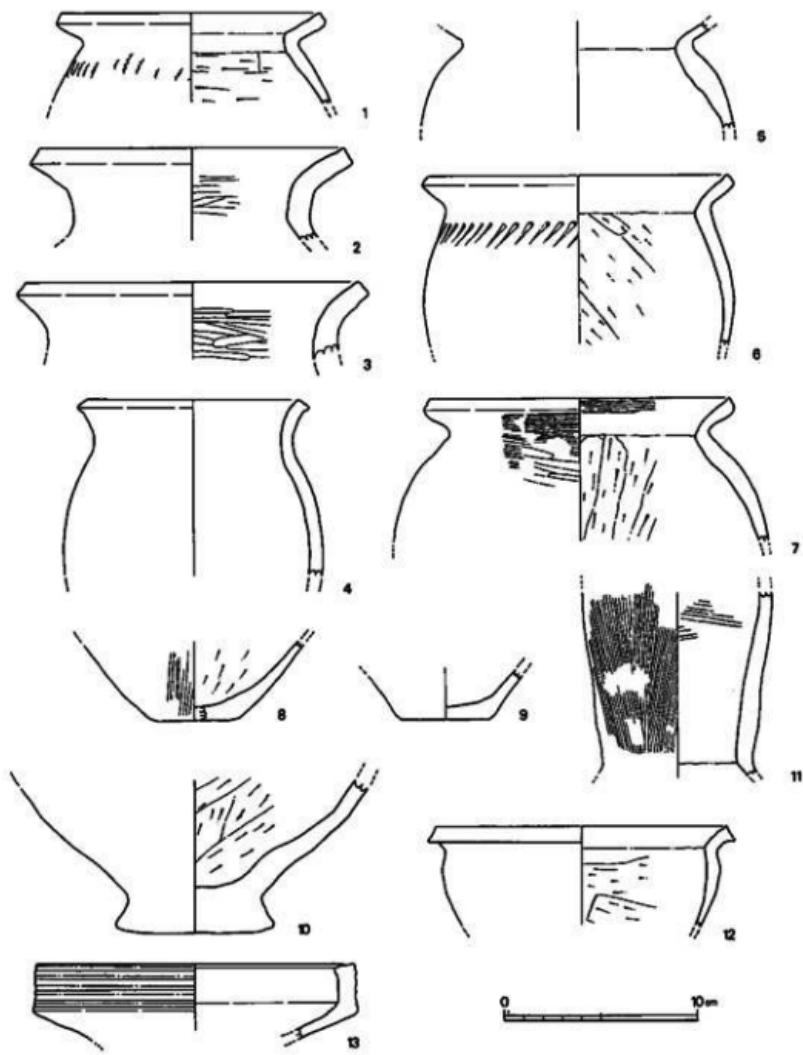
S X14 (第34図、図版14c)

調査区西北隅に位置している性格不明の遺構である。尾根頂部から西北方向に下る斜面上端にあり、S B 5 の西北西約 7 m, S K11 の北方 0.6 m の距離にある (標高 145~146 m)。南北を崖面等で失い、また、西側も調査区域外に及ぶために全容はつかめないが、長さ 2.6 m、幅 0.7~0.84 m にわたって地山を掘りこんで平坦面を作り、平坦面は 30 度の角度の斜面につづく。壁高は最大 25.5 cm で、斜面では北半部を中心に比較的多くの弥生土器片が出土した。そのほか、斜面中央部を中心に 3 箇所の貝殻の散布がみられ (範囲は径 20~30 cm 程度)、また、赤化した土のひろがり 2 箇所が認められた。出土遺物は、弥生土器 (甕・壺)、貝殻のみである。

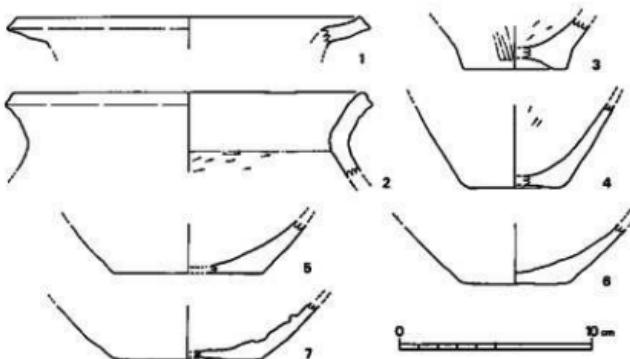
この S X14 については上面の平坦面を造り出した住居状の部分と、斜面の土器・貝殻が堆



第35図 堺谷東遺跡 S X14出土土器実測図 (1 : 3)



第36図 畠谷東遺跡調査区出土土器実測図(1)(1 : 3)

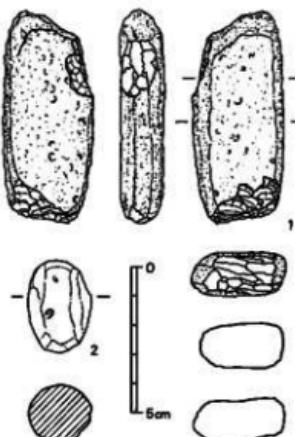


第37図 畠谷東遺跡調査区出土土器実測図(2)(1 : 3)

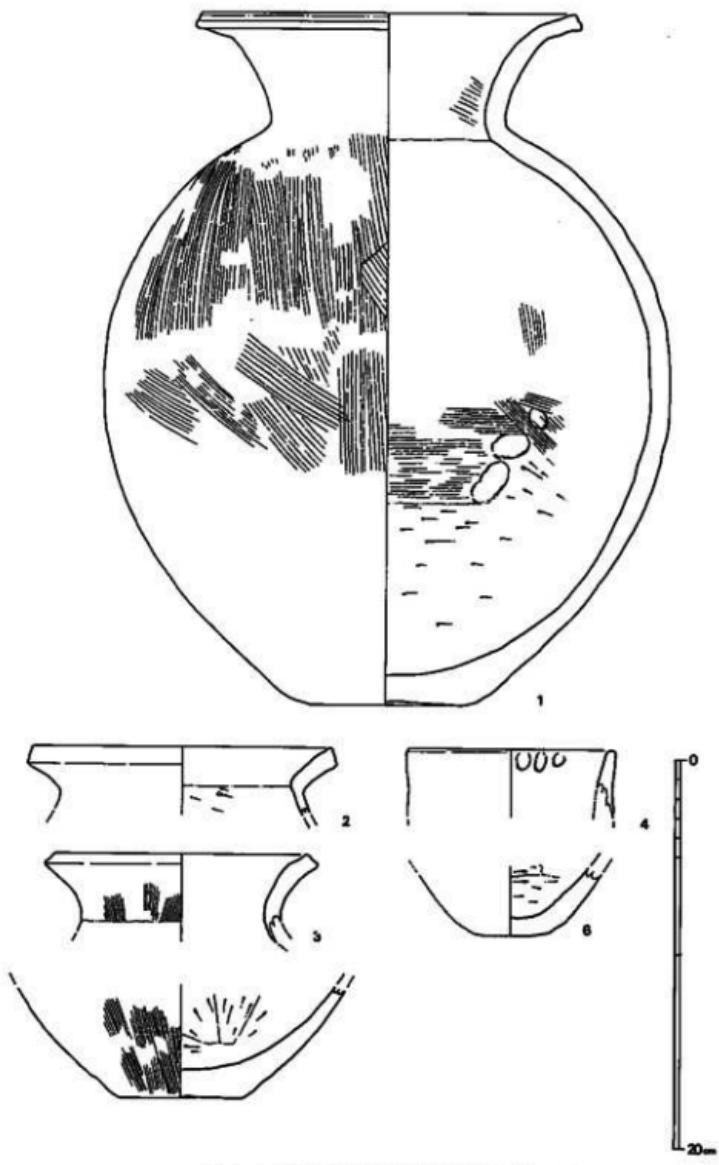
積した部分から成り、特に後者については単なる斜面堆積あるいは廃棄物であるのかなどその性格については不明な部分が多いが、現状では住居跡・土器窯などと含めて一つの遺構として捉えておきたい。そして、その所属時期は、土器(第35図)が示すところの弥生後期中葉を中心とした時期と考えられる。

#### 調査区・遺跡周辺出土の遺物（第36～39図）

調査区出土とした遺物の大半は、表土及び自然流路内埋土、SB9・SB10南斜面出土、そして表採品であり、弥生土器(壺・壺・鉢・高杯)・石器・土製品がある。土器はいずれも弥生後期中葉頃のものである。石器(第38図1)は、ハンマーストーンと考えられ、長さ7.3cm、幅3.15cm、厚さ1.4cmの扁平な淡黄白色の自然礫を用いている。自然礫の端部及び側面端部に各々顕著なつぶれ痕が観察される。石材は不明である。土製品(第38図2)は、長さ3.1cm、径2.1×1.95cmの楕円球状のもので、表面上にナデつけ状の痕跡がある。淡黄褐色を呈す。第39図はいずれも畠谷東遺跡の南方の地点で表採したものであり、弥生後期中葉を中心とした時期のものである。



第38図 畠谷東遺跡調査区出土  
石器・土製品実測図(1 : 2)



第39図 叠谷東遺跡周辺出土土器実測図(1:3)

第6表 登谷東遺跡出土土器観察表

博 物 館 番 号	器種	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	成形・調整の特徴	備 考
第23回 SB 5	鉢	口径 24.0	体部は内窓気味に外上方に立ちあがり。口縁端部を丸くおさめる。	口縁端部の内・外面はやや粗い横ナデ調整。体部内面は横ナデ調整、外面は板状工具によるナデ調整。	色調淡赤黄褐色 胎土 3 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存%
第27回 1 SB 9	甕	口径 18.4 頸径 15.8	くの字状に外反する口縁端部を僅かに上下に肥厚させ、端面に2~3条の凹線をめぐらす。	口縁内・外面は横ナデ調整。 肩部内面は若干斜位気味の継位へラ削りを施す。外面は刷毛目調整か。	色調淡赤黄褐色 ~淡黄褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を多含む。 焼成良好 残存%
2 SB 9	甕	口径 14.4 頸径 12.0	口縁部はくの字につよく屈曲し、端部を若干上方に肥厚させている。	口縁内・外面は横ナデ調整。 肩部内面はへラ削り。外面は若干斜位気味の継位へラミガキ調整の上から斜位に梯巻状工具による刺突文を施す。	色調淡茶褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存%
3 SB 9	甕	口径 16.2 頸径 13.4 肩部最大径 18.2	くの字状に外反する口縁端部を上方に肥厚させ、その端面に1~2条の凹線を現らす。 肩部最大径は肩部にあるために、やや肩の張る形態である。	口縁内・外面は横ナデ調整。 肩部外面は、肩部にくの字状に貝殻腹線による刺突文を現らす。その下位には斜位気味に継位刷毛目を施す(4条/cm)。肩部内面は横位あるいは斜位へラ削り。	色調淡赤黄褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を含む。 焼成やや不良 残存口縁部へ肩部下半分
4 SB 9	甕	口径 不明	くの字状に短かく外反する口縁部をもち、その端面は平坦である。	口縁内・外面とも横ナデ調整。 肩部外面は肩部に板状工具による刺突文。内面は横位へラ削り。	色調淡黄褐色 胎土 1 mm以下の砂粒を含む。 焼成やや不良 残存小破片。
5 SB 9	甕	口径 不明	くの字状に短かく外反する口縁端部を上下に若干肥厚させ、その端面は平坦におさめる。	口縁内・外面は横ナデ調整。 肩部外面に継位あるいは斜位の刷毛目状の調整を施す。	色調淡茶褐色 胎土 1 mm以下の砂粒を含む。 焼成やや不良 残存小破片。
6 SB 9	甕	口径 11.4 頸径 9.5	口縁部はくの字状に外反し、端部が僅かに上下に肥厚する。端面は平坦におさめる。	口縁内・外面は横ナデ調整。 肩部外面は肩部に斜位の板状工具による刺突文を施す。内面はへラ削り。	色調淡黄褐色 ~暗黃褐色。 胎土 1 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存%
7 SB 9	甕	口径 17.1 頸径 14.5	くの字状に外反する口縁端部を僅かに上下に肥厚させ。その端面は浅い凹線状を呈す。	口縁内・外面横ナデ調整。肩部外面は肩部にくの字に2列の貝殻腹線による刺突文を、その下位には斜位気味の継位	色調淡赤黄褐色 胎土 1 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好

押 固 番 号	器種	法 量(cm)	形 态 の 特 徴	成 形・調 整 の 特 徴	備 考
第27回 8 S B 9	壺	口径 15.7	くの字状に外反する口縁端部を上下に若干肥厚させ、その端面は横ナデ調整により幅広く中央が凹む。	刷毛目を施す(9~10条/cm)。 内・外面ともに横ナデ調整。	残存 1/4
9 S B 9	壺	口径 15.8 頸径 12.6	くの字状に外反する口縁部の端面は平坦である。	口縁内・外面は横ナデ調整。 肩部外面は縱位刷毛目(6条/cm), 内面はヘラ削り。	色調淡黄褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存小破片
10 S B 9	壺	口径 21.5 頸径 17.3	くの字状に外反する口縁端部近くの内面が若干凹む。その端面は横ナデ調整により中央が僅かに凹む。	口縁内・外面は横ナデ調整。 肩部内面はヘラ削りののち横位ヘラミガキを密に施す。外面は不明確だがヘラミガキ。	色調黄褐色 胎土 1 mm以下の砂粒を含む。 焼成やや不良 残存 1/6
11 S B 9	壺	口径 22.3 頸径 18.3	頸部から強く屈曲してくの字状に外反する口縁端部を上方に若干肥厚させる。その端面を平組におさめる。	内面は口縁から頸部にかけて横位ヘラミガキ, 肩部は横位ヘラ削り。外面は口縁から頸部にかけて横ナデ。肩部には貝殻腹縁による刺突文を施す。	色調茶褐色 胎土 1 mmの大砂粒を含む。 焼成良好 残存 1/6
第28回 17 S B 9	壺	口径 27.4	直線的に外上方にのびる口縁端部を下方に若干肥厚させ、その端面に浅い3条の凹線を残らす。口縁端面に円形浮文を貼付。	外面横ナデ調整。内面は横位ヘラミガキ。	色調淡赤褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を多含む。 焼成良好 残存 1/6
18 S B 9	壺	口径 17.8	外上方にほぼ直線的にのびる口縁端部を上下に僅かに肥厚させ。その端面に3条の凹線を残らす。	器壁の損耗著しく調整不明。	色調淡黄褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を多含む。 焼成良好 残存 1/6
19 S B 9	壺	口径 18.2	ほぼ直線的に外上方にひろがる口縁端部を上下に肥厚させ。その端面は中央が若干凹む。	肩部外面は粗い縱位刷毛目(6条/cm)を施す。	色調淡黄褐色 ~淡灰褐色 胎土稍良 焼成やや不良
20 S B 9	壺	口径 不明	複合口縁の壺の口縁部か。若干内横気味に立ちあがり、端部は外方につよく肥厚さす。その端面は平坦である。	外面はごく僅かに横ナデ調整による凹線状の凹みが3条残る。内面は横位ヘラミガキ。	色調淡茶褐色 胎土 1 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存小破片
21 S B 9	壺	口径 10.3	複合口縁の壺の口縁部。垂直に立ちあがる。	立ちあがり部外面は6条の浅い凹線。内面は横ナデ調整。	色調黄褐色 胎土 1 mm以下の砂粒を含む。

押 固 番 号	器種	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	成形・調整の特徴	備 考
第28回 22 S B 9	壺	頸径 7.4	長頸壺の頸部か。頸部下端に2段の断面三角形の突帯を付す。	外面縦位ヘラミガキ、内面は器壁の損耗著しく、調整不明。	焼成良好 残存%～%
24 S B 9	鉢	口径 40.2	くの字状に外上方に強く屈曲する口縁端部を上下に肥厚させ、その端面は幅広く中央が凹む。	口縁内・外面、胴部外面は横ナデ調整。胴部内面はヘラ削り。	色調淡赤黄褐色 胎土 3 mm以下の砂粒を多含。 焼成良好 残存%～%
25 S B 9	鉢	口径 頸径	頸部から外上方に外反する口縁端部を僅かに上下に肥厚させる。その端面は中央に幅広い凹部がみられる。	口縁内・外面、胴部上半の外面は横ナデ調整。胴部下半の外面は横位ヘラミガキか。内面は指頭による強いナデ。	色調淡黄褐色 胎土 2 mm以下の砂粒をや多く含む。 焼成やや不良 残存%
26 S B 9	鉢	口径 10.5	体部から内湾氣味に外上方に立ちあがる口縁部で、その端部は内傾している。	内面ヘラミガキ。外面は器壁の損耗のため、調整不明瞭。	色調淡黄褐色 ～淡赤黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存%
23 S B 9	高杯	脚端径不明	高杯の脚端部か。外下方に大きく外反して開き、端面は平坦で、その中央が横ナデにより若干凹む。外面の端部で1条の凹線がめぐる。	内面から外面端部にかけて横ナデ調整。外面は斜位氣味の縦位ヘラミガキを施す。	色調黃褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存小破片
27 S B 9	手捏 ね土 器	口径 4.4 底径 1.95 器高 4.95	塑形。平底の底部からやや内湾氣味に外上方に立ちあがる。端部は丸くおさめる。	内・外面とも縱方向の指頭によるナデを行う。	色調淡褐色～淡灰褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存完形
12 S B 9		底径 4.6	底部平。平底の底部から若干内湾氣味に外上方に立ち上がる。	全体に磨滅が顕著で不明瞭だが、外面は縦位あるいは斜位刷毛目(4～5条/cm)。	色調淡赤黄褐色 ～淡黃褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存%～%
13 S B 9		底径 5.0	平底の底部から若干内湾氣味に外上方に立ちあがる。	外面縦位刷毛目、内面縦位ヘラ削り。	色調淡赤黄褐色 ～明黃褐色 胎土 2 mm以下の

擇 図 番 号	器種	法 量(cm)	形 種 の 特 徴	成 形・調 整の特徴	備 考
					砂粒を多含。 残存%～%
第27図 14 S B 9	底径	5.4	底部片。若干あげ底気味の底部からほぼ直線的に外上方に立ちあがる。	全体に器壁が荒れて不明確だが、外面縦位刷毛目、内面ヘラ削り。	色調淡赤黄褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存%
15 S B 9	底径	4.6	底部片。部厚い平底。	調整不明瞭。	色調淡黄褐色～淡赤褐色 胎土比較的精良 焼成やや不良 残存%
16 S B 9	底径(推定)	3.7	平底か。	外面不明確。内面縦位ヘラミガキ。	色調茶褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存%
第28図 28 S B 10	壺	口径 10.1	くの字状に外反する口縁端部の端面を平坦におさめる。	口縁内・外面は横ナデ調整。 肩部外面は横位刷毛目、内面は横位ヘラ削り。	色調淡黄褐色 胎土 1 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存%
29 S B 10	壺	口径 13.5	くの字状にゆるく外反する口縁端部を下方に肥厚させる。 端面は平坦。	内・外面とも横ナデ調整。	色調茶褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存%
30 S B 10	壺	口径 15.6	外反する口縁端部を上下に若干肥厚させ、平坦な端面中央に縮広の凹線 1 条がめぐる。	内・外面とも横ナデ調整。	色調明茶褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を多含。 焼成良好 残存%
第33図 1 S K 13	壺	口径 14.4	無環壺の口縁部。若干内傾して直線的に立ちあがる口縁端部を内・外方にややつよく肥厚させる。若干内傾気味だがほぼ水平な口縁端面には横ナデによるごく浅い凹線状の凹み 2 条がめぐる。	内・外面とも横ナデ調整。外面には 7 条以上の凹線がめぐる。	色調淡黄褐色 胎土精良 焼成良好 残存%～%
2 S K 13	壺	口径 17.0 頸径 13.8	くの字状に外反する口縁端部を上・下方に肥厚させる。その端面には 3～4 条の凹線をめぐらす。	口縁内・外面は横ナデ調整。 肩部外面は肩部に貝殻模様による斜位の刺突文が 2 段くの字状にめぐる。この刺突文の	色調淡赤黄褐色～淡黄褐色 胎土 3 mm以下の砂粒を含む。

排 因 番 号	器種	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	成 形・調 整 の 特 徴	備 考
				下位にはヘラミガキか。肩部内面はヘラ削り。	焼成やや不良 残存%~%
第35回 2 S X14	壺	口径 20.4 頸径 17.5	くの字状に外反する口縁端部を僅かに肥厚させ、その平坦な端面中央に幅広の凹線状の凹みが1条めぐる。やや肩が張る。	口縁内・外面は横ナデ調整。 肩部外面は肩部に2段の、ヘラ状工具による斜位刺突文を、その下位にはヘラミガキを施す。内面は斜位あるいは縦位ヘラ削り。	色調淡黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存%~%
3 S X14	壺	底径 6.0	若干上げ底氣味の底部から内窓気味に外上方に立ちあがる肩部をもつ。	外縁縦位ヘラミガキ、内面縦位ヘラ削り。	色調淡黄褐色 ~淡赤黃褐色 胎土2mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存%強
4 S X14	壺	口径 不明	口縁端部を下方に若干肥厚させている。その端面に2条の凹線めぐる。	調整不明瞭。	色調淡黄褐色 胎土2mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存小破片
5 S X14	壺	口径 不明	口縁端部を下方に肥厚さす。	外面横ナデ調整、内面は調整不明瞭。	色調淡黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存小破片
6 S X14	壺	口径 不明	直線的にのびて端部が先細りになる口縁部で、その端面は外傾する。	調整不明瞭。	色調淡赤褐色 ~淡黄褐色 胎土3mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存小破片
7 S X14	壺	口径 不明	くの字状に外反する口縁端部を上・下に肥厚させ、平坦な端面の中央に浅く1条の凹線めぐる。	口縁内・外面は横ナデ調整。	色調茶褐色 胎土2mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存小破片
8 S X14	壺	口径 16.0 頸径 12.6	くの字状に外反する口縁端部を上下に若干肥厚させ、端面は平坦におさめる。	口縁内・外面は横ナデ調整。	色調淡明黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存%
1 S X14	壺	口径 16.0 頸径 12.8	くの字状に外反する口縁端部を上下に肥厚させ、その端面に2条の凹線をめぐらす。	口縁内・外面は横ナデ調整。 肩部外面に1条のヘラ状工具による斜位刺突文、その下位には横位・斜位のヘラミガキ。 頸部内面は指頭ナデつけ、肩	色調淡茶褐色 胎土3mm以下の砂粒やや多含 焼成良好 残存%

擇因 番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	備考
第35回 9 S X14		底径 不明	底部片。平底。	部内面は横位・斜位ヘラ削り。 外面ヘラミガキ、内面ヘラ削り。	色調淡黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存小破片
10 S X14		底径 6.5	底部片。平底。	調整不明瞭。	色調淡黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存%
11 S X14		底径 4.9	底部片。若干上げ底気味の底 部から僅かに内湾気味に外上 方に立ちあがる。	内面ヘラ削り、外面は調整不 明瞭。	色調淡茶褐色 ～淡黄褐色 胎土2mm以下の 砂粒を含む。 焼成良好 残存%
第36回 1 調査区	甕	口径 13.9 頸径 11.2	くの字状に強く屈曲する口縁 端部を上方に肥厚させ、その 端面は平坦におさめる。	口縁内・外面は横ナデ調整。 胸部外面は肩部に不揃いの貝 殻腹縁による斜位刺突文を一 段めぐらす。その下位には斜 位ヘラミガキあるいはヘラ状 工具による強いナデを施す。 胸部内面は横位ヘラ削り。	色調淡暗赤褐色 ～黄褐色 胎土3mm以下の 砂粒を含む。 焼成良好 残存%
2 調査区	甕	口径 16.6 頸径 12.2	頸部からゆるくくの字状に外 反する口縁部で、その端面は 平坦におさめる。	頸部内面は横位ヘラミガキ、 その他は横ナデ調整を施す。	色調淡赤黄褐色 胎土3mm以下の 砂粒を含む。 焼成良好 残存%
3 調査区	甕	口径 18.2	口縁部は部厚く、ゆるく外反 し、その端面は平坦に仕上げ る。	頸部内面は横位ヘラミガキ、 その他は横ナデ調整を施す。	色調淡赤黄褐色 胎土5mm以下の 砂粒やや多し。 焼成良好 残存%
4 調査区	甕	口径 12.0 頸径 10.4	ゆるやかにくの字状に外反す る口縁端部を外方に僅かに肥 厚させ、その端面をほぼ平坦 に仕上げる。	口縁～頸部の外面には縦位の 刷毛目あるいは板状工具によ るナデ調整。その他は調整不 明瞭。	色調明黄褐色 胎土1mm以下の 砂粒を含む。 焼成やや不良 残存%～%
5 調査区	甕	頸径 12.0	若干肩の張る頸部からくの字 状に外反する両手の口縁部を もつ。	口縁～頸部外面は横ナデ調 整。その他は調整不明瞭。	色調淡赤褐色 胎土2mm以下の 砂粒を含む。 焼成良好 残存%

押 固 番 号	器種	法 量(cm)	形 狽 の 特 徴	成 形・調 整の特徴	備 考
第36回 6 S B 9	壺	口径 16.1 頸径 13.7	くの字状に外反する口縁端部を上方に若干肥厚させる。その端面は平坦に仕あげる。	口縁内面～頸部外面は横ナデ調整。外面胴部下半は縱位ヘラミガキ。胴部内面は斜位ヘラ削り。	色調茶褐色 胎土 3 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存%～%
7 調査区	壺	口径 16.1 頸径 13.5	若干肩の張る胴部から比較的強くくの字状に屈曲する口縁端部を上方に肥厚させる。端面には横ナデにより1～2条の凹線状の凹みをつくる。	口縁内・外面は横位刷毛目。外面胴部上半は横位刷毛目のち横位ヘラミガキ。下半はヘラミガキを施す。胴部内面は縱位ヘラ削り。	色調淡赤黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存%～%
8 調査区		底径 4.7	底部片。薄手の平底からひらき気味に外上方にほぼ直線的にのびる。	外面縱位刷毛目、内面ヘラ削り。	色調淡茶褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存%弱
9 調査区		底径 4.6	底部片。薄手の平底から外上方に立ちあがり、途中でさらには外反しながらのびる。	外面・外底面はヘラミガキ、内面は調整不明瞭。	色調黄褐色～淡褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存%強
10 調査区		底径 8.2	底部片。胴部との接合面でくびれる続高台状の平底をもつ。	内面縱位ヘラ削り、外面は調整不明瞭。	色調淡茶褐色～淡黄褐色 胎土 3 mm以下の砂粒多含。 焼成良好 残存%
11 調査区	壺	頸径 7.8	長頸壺の頸部か。僅かに外傾気味に立ちあがる。	外面縱位刷毛目(7～8条/cm)。内面上半は横位刷毛目、下半は縦ナデ。	色調淡赤黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存%
12 調査区	鉢	口径 15.8 頸径 14.1	最大径が肩部にあるために多少肩の張る胴部から、短かくくの字状に外反する口縁部をもつ。端部は上、下方に肥厚させる。端面は若干凹むが、ほぼ平坦に仕上げる。	口縁内・外面は横ナデ調整。調部外面はミガキ状、内面は横位ヘラ削りを施す。	色調黄褐色～淡胎土比較的精良 焼成良好 残存%
13 調査区	高杯	口径 16.5	若干開き気味に外上方にのびる体部から。若干内傾するもののほぼ直立する口縁部をもつ。口縁部は部厚く、端部を若干内方に肥厚させ。口縁外面に5条の凹線を造らす。	口縁内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は調整不明瞭。	色調淡赤黄褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存%

擇図 番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	備考
第37図 1 調査区	甕	口径 19.0	水平に近く屈曲してのびる口縁部で、端部を若干上方に肥厚させている。	調整不明瞭。	色調黄褐色 胎土2mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存小破片
2 調査区	甕	口径 19.2 頸径 16.7	くの字状に外反する部厚い口縁端部を、僅かに下方に肥厚させる。端面中央は若干凹む。	口縁内・外面へ胴部外面は横ナデ調整。胴部内面は横位ヘラ削りを施す。	色調暗褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存%
3 調査区		底径 5.4	底部片。上げ底氣味の平底。	外底面ナデ、内面ヘラ削り。 外面は調整不明瞭。	色調淡黄褐色 胎土3mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存小破片
4 調査区		底径 4.6	底部片。若干上げ底氣味の平底。	調整不明瞭。	色調暗茶褐色 胎土2mm以下の砂粒多含。 焼成良好 残存%
5 調査区		底径 7.8	底部片。平底。	調整不明瞭。	色調淡赤黃褐色 ～黄褐色 胎土1mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存%～%
6 調査区		底径 5.6	底部片。平底。	調整不明瞭。	色調暗茶褐色 胎土2mm以下の砂粒多含。 焼成良好 残存%～%
7 調査区		底径 7.8	底部片。若干上げ底氣味の平底。	調整不明瞭。	色調暗灰色～黄褐色 胎土3mm以下の砂粒比較的多含 焼成良好 残存%強
第38図 1 遺跡 周辺	甕	口径 19.9 頸径 7.8 胴部最大径 29.3 器高 35.8	若干上げ底氣味の平底。胴部最大径が胴部中央より若干高位にあるが、ごく僅かに継長の球状の胴部をもつ。頸部はかなりすぼまり、この頸部から口縁部が外上方に外反しながら立ちあがり、肩部付近で	口縁内・外面は横ナデ調整。 胴部外面上半～中位に継位ないしは斜位刷毛目(4～5条/cm)。下半は、ヘラミガキ状の痕跡がみられる。外底面はナデ調整。頸部内面には僅かに斜位刷毛目の痕跡をとど	色調淡赤黃褐色 胎土3mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存口縁%。胴部%

排 図 番 号	器種	法 量(cm)	形 态 の 特 徴	成 形・調 整の特徴	備 考
			さらに外反し、水平に近くなる。端部を下方に肥厚させ、平坦に仕上げた端面の中央にはごく浅い凹線 1 条を残す。	をとどめ、腹部内面は上位が不定方向のナデ調整。中位は刷毛目、下位はヘラ削りのちナデ調整。	
第39回 2 遺跡 周辺	甕	口径 16.0	薄手の肩部からくの字状に屈曲する部厚い口縁部は、端面を平坦におさめ、端面中央に 2 条の凹線状の凹みが残る。	口縁内・外面～頸部外面は横ナデ調整。腹部内面はヘラ削りを施す。	色調淡黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存小破片
3 遺跡 周辺	甕	口径 14.1	くの字にゆるく外反する口縁部で、その端面は平坦におさめる。	口縁内・外面の上半はやや粗い横ナデ調整。口縁内面下半はミガキ状の痕跡をとどめる。口縁外面下半は細かな縦位刷毛目(14~15条/1cm)を施す。腹部内面はヘラ削りか。	色調淡黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存%
4 遺跡 周辺	甕	口径 10.8	直口甕の口縁部か。ほぼ垂直に立ちあがり。途中で若干外反し、端部は丸くおさめる。	内・外面とも横ナデ調整。内面に指頭圧痕が残る。	色調黃褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存%
5 遺跡 周辺		底径 6.6	底部片。比較的部厚い平底から若干内湾気味に立ちあがる。	腹部外面は刷毛目調整(7~8条/cm), 内面ヘラ削り。外底面ナデ調整。	色調淡茶褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存底部完存
6 遺跡 周辺		底径 4.6	底部片。丸底気味の平底。外底面の縁辺に木葉痕が残る。外底面は使用に伴うと思われる磨滅が著しい。	外面ナデ調整。内面ヘラ削り。	色調淡赤黃褐色 ～黃褐色 胎土 2 mm以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存底部完存

### 3.まとめ

豊谷東遺跡は、広島市東郊の呉婆々字山山頂から西方に派生する尾根上に立地する弥生後期の集落跡である。

本遺跡は、昭和48年に発掘調査が行われた県史跡豊谷遺跡が立地する丘陵尾根と同一丘陵尾根上に立地しており、豊谷遺跡は本遺跡から約200m丘陵尾根を下った丘陵先端部付近に立地している。本遺跡と豊谷遺跡との間は未調査であるが、本遺跡の造構のあり方からすると未調査の部分にも造構が存在している可能性が十分考えられる。したがって、本遺跡と豊谷遺跡は一連の遺跡である可能性がある。豊谷東遺跡で検出した造構は、概ね尾根頂部と南斜面下の2箇所に立地し、その内訳は、堅穴式住居跡10軒、土塁3基、性格不明造構1である。SB1～SB5・SK11・SK12・SX14が尾根頂部に、SB6～SB10・SK13は南斜面下に存在する。

住居跡の平面形は、円形3軒(SB1・SB4・SB5)、方形あるいは隅丸方形4軒(SB2・SB7・SB9・SB10)、不明2軒(SB3・SB8)である。主柱穴の数及び配置状況については、SB5が4本柱、SB3・SB9は2間×2の長方形ないしは方形に主柱を配したもの、そしてSB4は建て替えを1度行っているために都合2度にわたって主柱を円形に配した上屋構造をもっていたものと推定される。壁溝については、SB1・SB2・SB4・SB5・SB9の5軒についてはその存在が認められるが、残りの住居跡に関しては壁溝の存在はみられなかった。また、炉跡については焼土・炭の充満した炉穴は皆無であるが、SB4・SB10の床面では大形で浅い掘り込みを検出し、また、SB9の床面には2箇所の焼土・炭の集中部分が存在した。

遺物は、SB9・SX14を中心に弥生土器(壺・壺・鉢・高杯・手捏ね土器)・土製品・鉄器・石器が出土している。鉄器は用途不明のものでSB9・SK13から各1点出土している。土製品・石器各1点はいずれも表土中よりの出土である。土器の大半は壺で占められており、壺はその口縁端部の肥厚の有無及び口縁端面における凹線文の有無などにより大きく3形態に分類できる。即ち、

- 1類……口縁端部を上方にのみやや顯著に肥厚させ、下方は丸くおさめる。端面には2～4条の凹線文が認められる(第27図2・3、第32図2、第36図1・6・7)。
- 2類……口縁端部を上・下方にわずかに肥厚させる。端面中央が横ナデにより大きく凹むが、凹線文は殆んど認められない(第27図1、第28図30、第35図4・7、第37図2)。
- 3類……口縁端部の肥厚は認められず、端面の凹線文は消失し平坦面となる(第27図4・5・6・7・9・10・11、第28図28・29、第35図5・6・8、第36図2・3・4、第37図1、第39図2・3)。

口縁部の調整は内外面ともに横ナデであるが、内面にヘラミガキを施すもの(第27図11)、刷毛目の認められるものなどがある。口縁部外面の横ナデは、基本的に肩部付近にまでおよぶ

び、頸部でとまることは少ない。胴部内面は一様に頸部付近までおよぶヘラ削りを施しているが、一部にヘラ削りの上にヘラミガキを施すものもみられる(第27図10、第36図2・3)。頸部内面は、部分的なミガキないしはナデ状の調整を施すものが一部存在する(第27図3・4・10、第32図2、第36図5・7)。胴部外面は、ヘラミガキと刷毛目が認められ、前者が主として1類の壺に、後者は3類の壺を中心に認められる。肩部外面には貝殻腹縁・ヘラ状工具・櫛齒状工具による刺突文がやや顯著に認められる。その主体は貝殻腹縁及びヘラ状工具による施文で、前者は上下2列にくの字状に斜位刺突文を施すもの(第27図3・7、第32図2)と、1列のみ斜位の刺突文を施すもの(第27図11、第36図1)とがある。第35図1のみ壺であるが、残りはいずれも壺である。しかも、1~3類にわたってこれらの刺突文は認められるが、概して1・2類では整然とした刺突文で、3類では貝殻腹縁・ヘラ状工具による刺突文はいずれも乱雑・小形化しており、1・2類のものに比べ退化した状態を示している。次に、底部は壺・壺の明確な区別はつきにくい。よって一括して以下に述べる。図示した底部20例のうち、上げ底あるいは上げ底気味のものは8例、丸底気味の平底1例、平底11例である。底径は4.6~8.2cmの範囲におさまる。内面の調整はほぼ一様にヘラケズリだが、外側は平底のものが刷毛目調整とヘラミガキ調整の両方が認められるのに対し、上げ底のものはヘラミガキ調整が大半を占めている。

これら1~3類の壺を中心に構成される疊谷東遺跡の弥生土器の時期は、その口縁端部の肥厚、口縁端面の凹線文、胴部内面全体に及ぶヘラケズリ調整、胴部外面に施されるヘラミガキ・刷毛目調整、肩部外面の貝殻腹縁、ヘラ状工具による刺突文、などの形態・調整における諸特徴より弥生後期中葉を中心とした時期に求めることができよう。特に、壺については1類→2類→3類といった変遷が考えられ、中でも3類の壺は、口縁端部の肥厚の消失・口縁端面の凹線文の消失・肩部外面の刺突文の衰退・胴部外面の刷毛目調整の顕在化、などの諸特徴から弥生後期中葉にかかる可能性が考えられるが、いずれにしてもごく短期間での変遷としてとらえておきたい。

次に、本遺跡の集落構成について若干触れておきたい。住居跡10軒は大別して尾根頂部遺構群と南斜面遺構群に分れ、さらに切り合い関係・壁間距離などから各2グループずつ計4グループにまとめることができる。第1グループ(SB1・SB2)、第2グループ(SB3・SB4・SB5)、第3グループ(SB6・SB7・SB8)、第4グループ(SB9・SB10)である。各グループ毎に2~4回の住居の建て替えによる重複関係が認められる。このことは、各グループ毎に2~4期の変遷が考えられることを示している。しかし、これらの変遷から短絡的に、本遺跡が一つの集落として弥生後期中葉のごく短期間に2~4期の変遷を示したものだと想定しない。つまり、10軒の住居跡のうちで、出土遺物からその時期を明確にできるのはSB9・SB10のみであって、他の8軒については明確な時期を示すできない。

(註) 広島県教育委員会「疊谷遺跡」『広島県文化財調査報告』第14集 昭和58(1983)年。



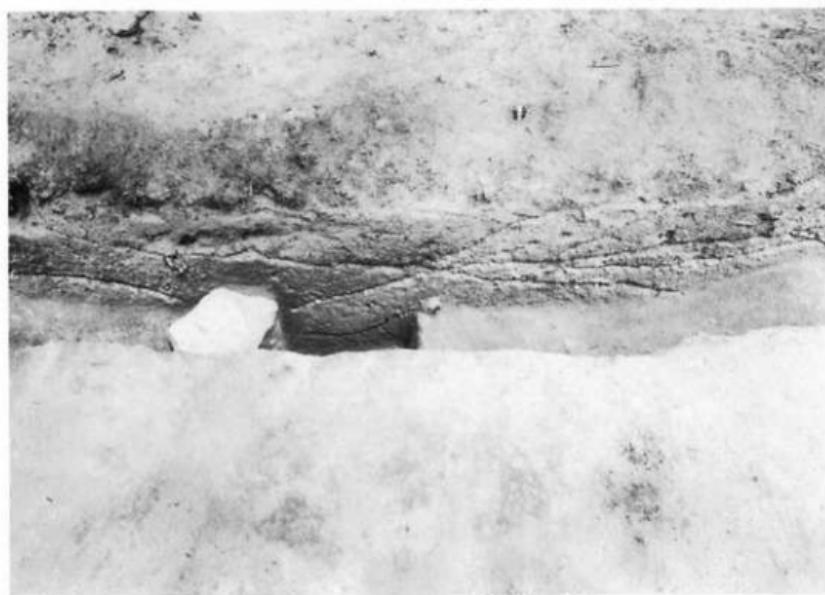
a 須賀谷古墳群遠景(南より)



b 須賀谷古墳群全景(調査前, 南より)



a 須賀谷第1号古墳全景(調査後、東より)



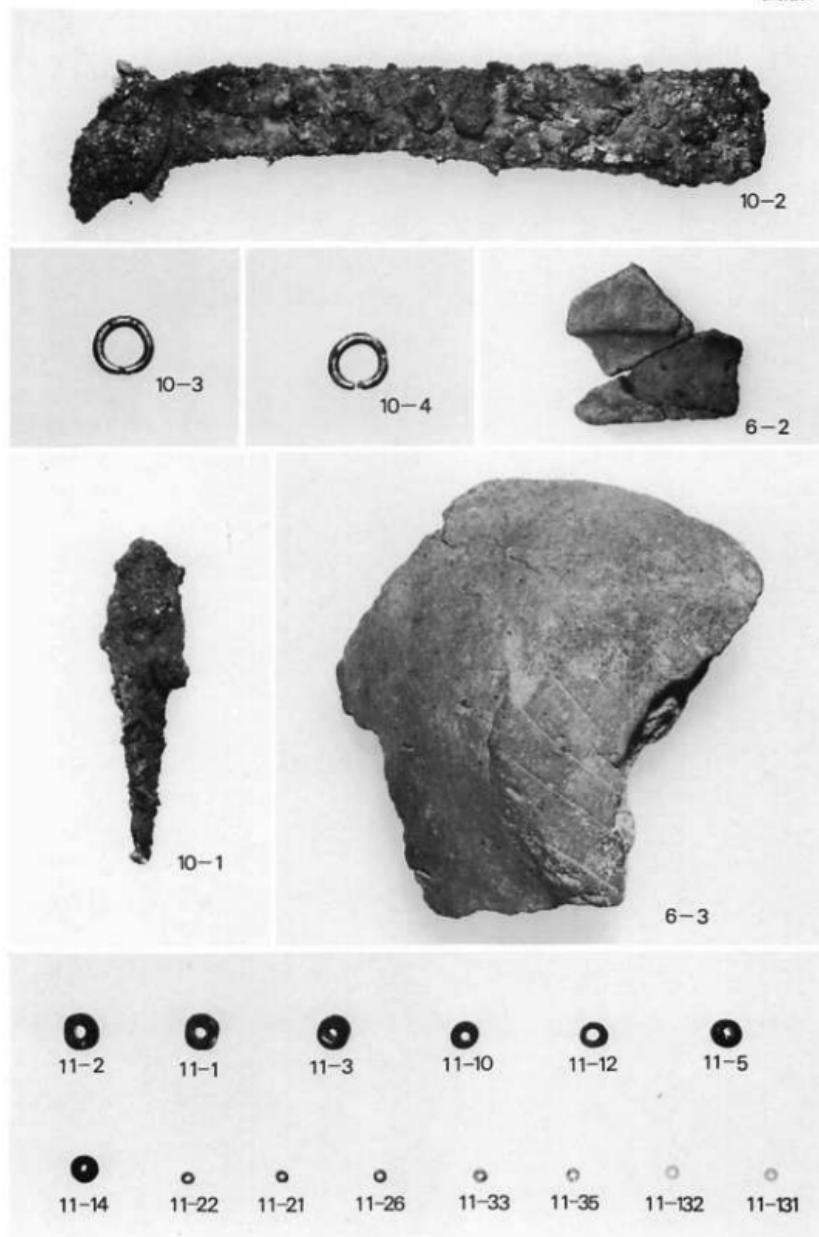
b 須賀谷第1号古墳周溝断面(南より)



a 須賀谷第1号古墳主体部(北より)



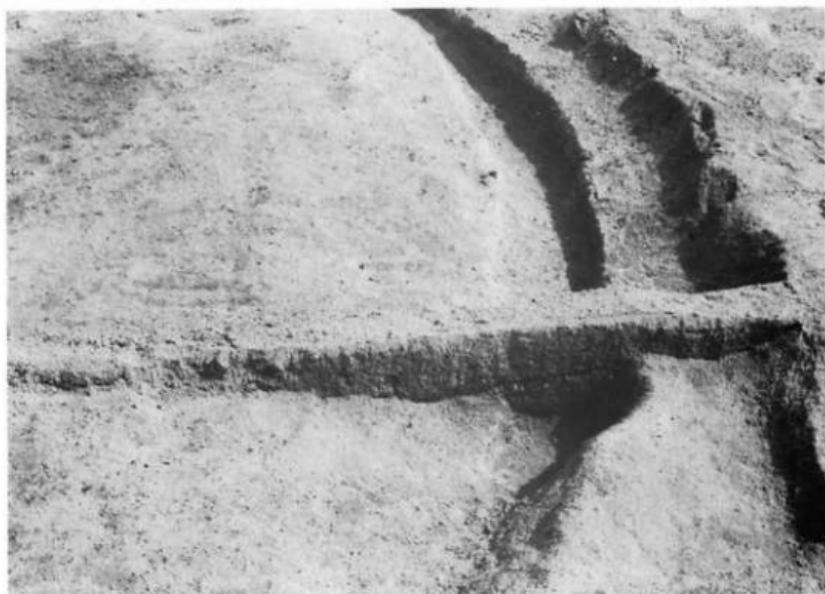
b 須賀谷古墳群SK 2(西より)



須賀谷第1号古墳出土遺物



a 須賀谷古墳群SK1(北より)



b 須賀谷古墳群SX3(南より)



a 須賀谷第2号古墳全景(調査後、東南より)



b 須賀谷第2号古墳周溝断面(西より)



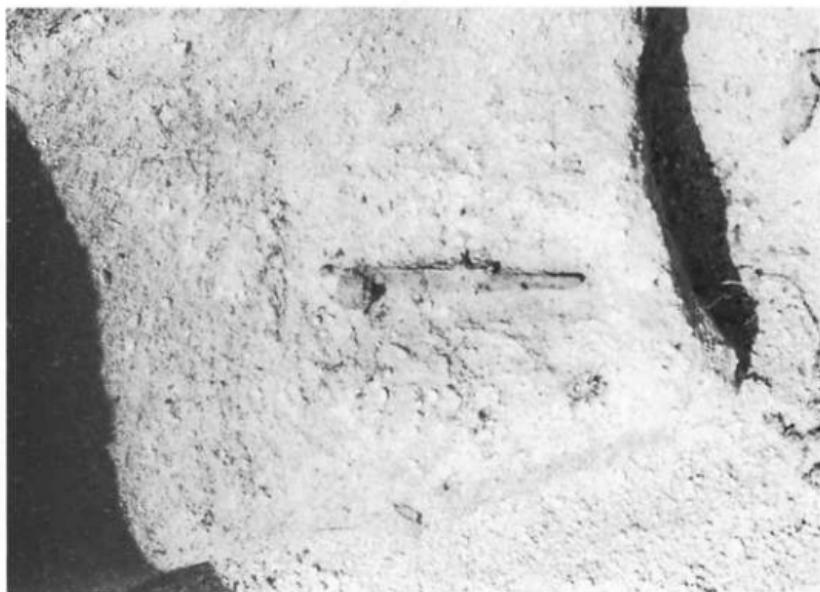
a 須賀谷第2号古墳第1主体部(北より)



b 同 上 玉類出土状況(北より)



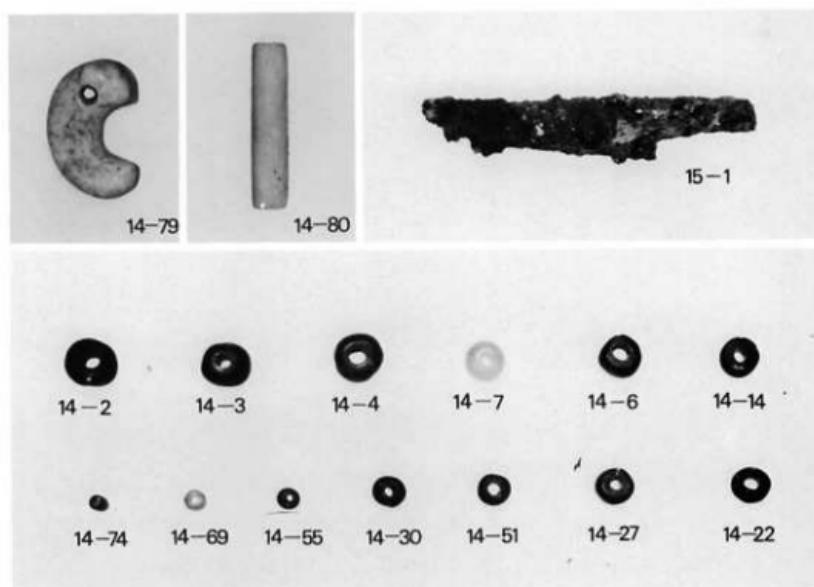
a 須賀谷第2号古墳第2主体部(南より)



b 同 上 鉄刀子出土状況(南より)



a 須賀谷古墳群SK4(北より)



b 須賀谷第2号古墳出土遺物



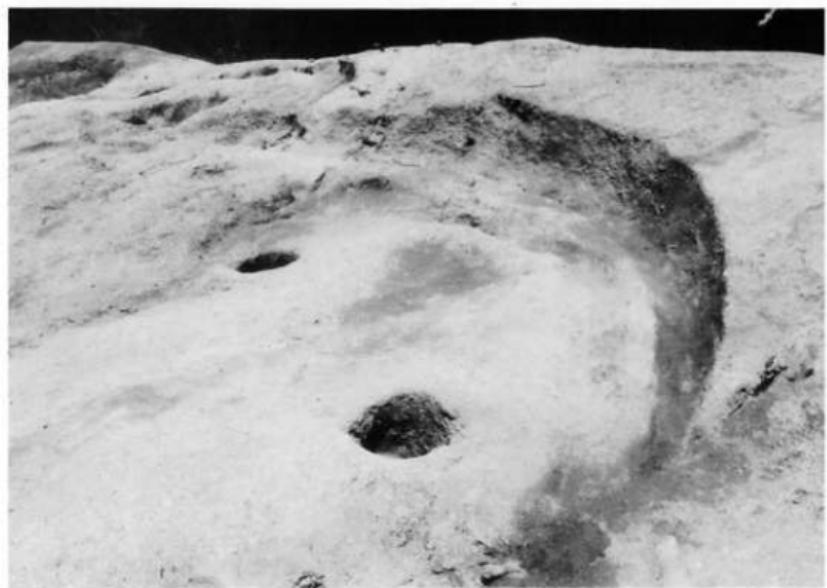
a 豊谷東遺跡遠景(西より)



b 豊谷東遺跡近景(調査前, 西より)



a 豊谷東遺跡SB1～SB5(西より)



b 豊谷東遺跡SB1・SB2(東南より)



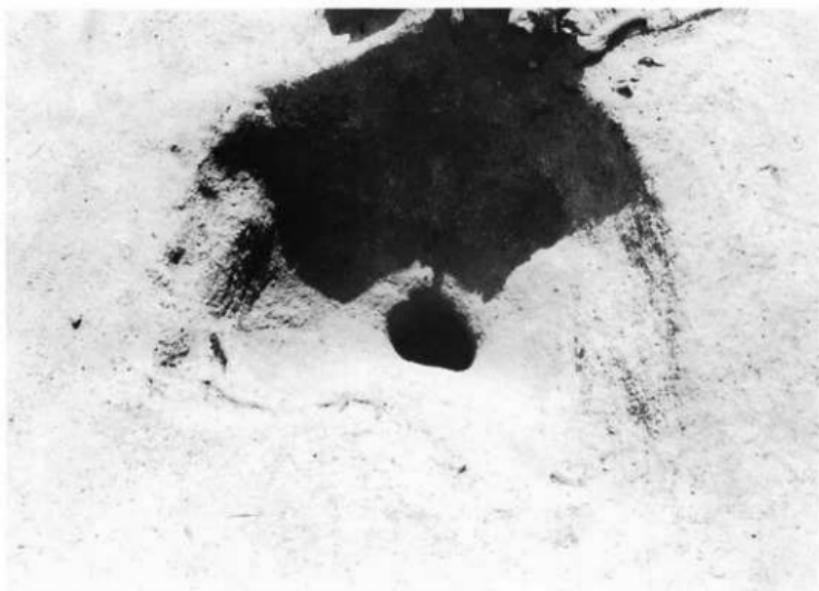
a 畠谷東遺跡 S B 3・S B 4(西より)



b 畠谷東遺跡 S B 5・S K12(西より)



a 畠谷東遺跡SB 6・SB 7・SB 8(西より)



b 畠谷東遺跡SK11(南より)



a 畠谷東遺跡SB9・SB10(西より)



b 畠谷東遺跡SK13(西より)



c 畠谷東遺跡SX14(北より)

図版15



豊谷東遺跡出土遺物(1)

図版16



豊谷東遺跡出土遺物(2)

図版17



畠谷東遺跡出土遺物(3)

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第41集  
須賀谷古墳群・豊谷東遺跡発掘調査報告書

発行日 昭和60(1985)年3月31日

編集・発行

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

734 広島市西区観音新町4丁目8-49

TEL(082)295-5751

印刷所

中本総合印刷株式会社